

北京日記3

月日	イベント	宿泊地 (在北京は省略)
10月1日(水)	莫高窟	敦煌
2日(木)	莫高窟	敦煌
3日(金)	白馬塔・西千仏洞・陽関	敦煌
4日(土)	玉門関	敦煌
5日(日)	鳴沙山・月牙泉	敦煌
6日(月)	榆林窟	敦煌
7日(火)	敦煌市内	敦煌
8日(水)	敦煌から帰る	
9日(木)	日本学総合講座	
10日(金)	瀋陽へ	瀋陽
11日(土)	国際学術研究会 初日	瀋陽
12日(日)	国際学術研究会 2日目	瀋陽
13日(月)	瀋陽見物	瀋陽
14日(火)	江戸リサイクルの話	
15日(水)	中国社会科学院講演	
16日(木)	中国宇宙飛行	
17日(金)	院生夕食会	
18日(土)	潭柘寺	
19日(日)	北京シリコン・バレー	
20日(月)	ルフトハンザとイケア	
21日(火)	天津へ	天津
22日(水)	南開大学講義	
23日(木)	授業	
24日(金)	円明園・雑技	
25日(土)	北海公園	
26日(日)	広東料理	
27日(月)	茶芸館	
28日(火)	授業	
29日(水)	元土城遺址公園	
30日(木)	日本学総合講座	
31日(金)	歴史博物館	

10 / 1 (水)

国慶節。ホテルで朝食。8:15、サンタナで莫高窟へ出発。道の両側の畑には棉花が栽培されている。丈の低い品種で、棉つみは腰をかがめなければならない。運転手の柴さんが、敦煌の綿は品質が良く、ピンク色のも採れるとのこと。飛行場の手前を右折して砂漠を走ると左右に丘陵が見えてきて右手に窟がある断崖が現れた。あれは僧侶や職工の住居跡が大部分で、仏像などのあるものは少ないと説明してくれた。すこし走ったところが莫高窟。入場料@100元を支払って、説明人の劉さんとなかに入る。

ほかの日本人ペア2、3組と一緒に、17、26、29、61、94、96、130、148、237、249、257、335、427、428、454の15窟を回る。第17窟は有名な蔵経洞で、戦乱期に右脇の部屋に古文書を隠してから開かれることなく忘れられ、1900年に発見された窟。発見された敦煌文書は、フランス、イギリスなどに持ち去られて中国に残存するのは小部分になっている。ヨーロッパのシナ学レベルが高いのも、エジプト学同様に文化略奪のお陰だ。説明板では、敦煌の古文書の略奪者の名前には、日本も上げられている。

敦煌の表看板になっている第96窟の34.5mの石仏を囲う9層の楼閣の前には、平山郁夫が日本円2億円を寄付して敦煌保存ファンドを作った記念碑が建っている。石窟の向かい側には博物館が、これも日本政府の援助で建てられている。敦煌好きの日本人が、遺物保存に協力するのは、罪滅ぼしにはならなくても、悪いことではない。

15の石窟は、それぞれ美しく見ごたえがある。第249窟の眼が4つある阿修羅像とその下のイノシシの親子の線画は上手だ。顔料に含まれる鉛のために、肌色が薄黒く変色して、仏がインド人風になっている壁画が多い。ゴールデンウィークに入ったので訪問客は多く、前のグループが終わるまで窟の前で待つことになる。この期間は一般公開される窟が増やされて15になったが、普段は10窟とのこと。公開することに伴う壁画の劣化が懸念されているので、公開を制限する方向に向かっているとのこと。

15窟を見終わって、預けたカメラとバッグを引き取り、作品展示場に入る。敦煌研究院所属の画家による模写作品が展示販売されている。黄河という画家の作品を勧められ、なかなか見事なので3点購入。画家本人がいたので、一緒に写真を撮る。

昼食は唯一のレストランで、北京肉絲、トマトの炒り卵、ほーれん草と豆腐炒め、紫菜湯、ビール(70元)。

午後は、劉さんの案内で特別窟、45、57、254、275、320を見る。前4窟で料金は@300元。

第45窟は、盛唐(8世紀)期の開発で、本尊を中心に弟子、菩薩、天王各2体の塑像があり、壁画は法華経由来の仏画。向かって右に立つ文殊菩薩が美しい。S字形に体をひねった立像は、少し豊満で美人。平山画伯が敦煌の恋人と呼んだ逸品だ。

第57窟は、初唐(7世紀)のもので、樹下説法図の向かって左側の観音画像が評判の美しさ。右の菩薩画像が薄黒く変色しているのに、観音像は肌色が美しく残っている。飾りの金箔も残っている。こちらは、井上靖の恋人。さすがに見事だ。この観音像の模写を午前中に購入した。

第254窟は、脚を交差した弥勒菩薩の塑像がある。台座には、翼をもつ天馬が描かれている。北魏(5世紀)のもので、菩薩の表情にガンダーラ仏の影響がうかがえる。壁画は、サッタ太子の餓虎への献身の話。捨身飼虎図だ。ここでは、崖から身を投げた太子の肉を虎の親子が食べ、骨が両親兄弟によって舍利塔に祭られるストーリーになっている。一般公開の第428窟の壁画も同じテーマだが、巻絵をS字型に描いたものとは違って、254窟のは時系列的描写でなく同一平面上に散らばって各シーンが描かれている。

第275窟は、他の窟の2倍の120元の拝観料。北涼(5世紀初)のもので、今日の見学のなかでは最古の窟。脚を交差させて獅子台に座る弥勒菩薩塑像。腕が破損していて、芯に麦藁が使われているのが分かる。壁画の飛天は、たくましくて男性的な表現。古い時代の飛天は、みな男性的だ。

最後に劉さんが特別に見せてくれたのが第320窟。天井の装飾模様が美しい彩色を残し、

デザインとしても実に見事だ。敦煌の絨毯の図柄に使われるという。他にも天井の図柄が美しい窟が沢山あるそうだ。そして、飛天が見事。盛唐の作品で、もう、しなやかな女性として表現されている。入場券に印刷されている飛天だ。4体描かれていて、急上昇するものや振り返って手招きする構図は、流れるような動きがあって素晴らしい。

見終わって、図録を買いに作品展示館に行く。黄河さんの飛天図を見て、また購入する。図録2冊、絵はがき3種も買う。

待っていた柴さんの運転で、劉さんも一緒に帰る。劉さんは北京第2外国語大学で2年間日本語を学び、敦煌研究院に入って18年のベテラン説明員。建築など自分でも研究して論文を発表している。祝日なので、小学生のお嬢ちゃんも敦煌に来ていた。

かなりくたびれてうとうとする。7時過ぎてようやくたそがれてきたので、街へ。とても賑わっている。鶏湯麺の店で夕食。2人で5元。帰路、飛天の模写画を購入。ホテル売場で敦煌絹絨毯の工場経営者に大幅値引き提案で迫られるがペンディングにする。

10/2(木)

朝、5時に目覚めるがまだ真っ暗。社会科学院の講演レジュメを完成させた6時45分頃、ようやく砂丘の上が白み始めた。国内に時差がない国だから、実生活上はすこし不便だろう。ホテルで朝食。オムレツを頼み、適当なところでストップしてもらったら半熟のができて美味しい。8:00、柴さんの車で出発、途中で給油する。ガソリンは1リッター3.01円で、日本の半値以下だ。レギュラーとハイオクの区別は無いらしい。劉さんは研究所の通勤バスでもう着いていた。

劉さんの案内で156、158、159、220、285、322の特別窟を見る。料金は1人640元。一般入場券は買わないで入れた。

第156窟は晩唐(9世紀後半)期のもので、敦煌の支配者、張議潮の外出の行列風景を描いた出行図が向かって左側、夫人の宋国の出行図が右側に描かれている。当時の貴族、軍人や役人の風俗画になっていて面白い。夫人の図の先頭には竿灯乗りの雑技者も描かれている。

第158窟は中唐(8世紀末~9世紀前半)期の窟。大型の涅槃仏がある。左端にかがんでお顔を見上げると実に美男におわす。敦煌の3美人のひとり。壁画は、涅槃に入った仏陀を取り巻く菩薩、弟子、大衆。遠くから馳せ戻った迦葉(カショウ)が仏陀にすがりつこうとするのを他の弟子たちが止めたり、悲しみのあまり剣や小刀で自殺しようとしている民衆がリアルに描かれている。各国を代表する王子などの人物も悲しみの表情。飛天までが、泣いているようだ。菩薩たちは、悲しむ群像と対照的に、静かに仏陀の涅槃を見守っている。

仏陀の表情は、肉体が滅びて仏になることを喜ぶような微笑みとか、「絶える喜び」と言われているようだ。たしかに、厳粛な涅槃ではなく、ある種の喜びを感じさせるお顔だ。これまで看取ってきた親たちは、安堵・静安を感じさせる死を見せてくれはしたが、喜びというのではない。凡人はこうはいかないのだ。

第159窟も中唐期。普賢菩薩と文殊菩薩の見事な立像で有名。顔の肌が白く艶やかに光っている。顔料に卵白を加えた技術。唐代の美人の典型で、ふくよかな顔立ちと体つき。向かって左の菩薩はワンピースにスカフ、右像の上半身は短いスカフを纏うだけの異国風。並ぶ2体の天は、皮の鎧を着て邪鬼を踏み敷いている。

壁画は普賢菩薩が白象に乗って行列する様子。東側には、仏典の権威者、維摩詰が病氣と偽っているところに文殊菩薩が見舞いに来て問答をする場面も描かれていて面白い。

第220窟は初唐(7世紀)期の壁画の上に11世紀に千仏画が上書きされていたのを、1948年に剥離させて唐代の壁画をよみがえらせた窟。このために色彩の保存状態が良く、莫高窟随一と言われている。作成年を記した墨書も残されていて年代確定ができる。

図柄は阿弥陀、薬師の浄土を描いたもので、舞い踊る人物と楽隊の描写が素晴らしい。胡旋舞と呼ばれているように、踊る人物が纏っている長いスカフが空中を流れるように描かれていて、急旋回しながら舞っている様子が活写されている。楽士の眼も、笙を吹く男

性は一点を凝視しているのに対して、横笛を吹く女性は目線が流れて首を振りながら演奏している感じが出ている。なかなかの描写力だ。

楽隊は 15 種類の楽器を奏でているという。この図などから、敦煌研究院では、現存しない古楽器の復元をしたそうだ。

拝観料@200 元と最高額を取るだけのことはある。

第 285 窟も@200 元。西魏（6 世紀前半）期のもので中央に 30cm ほど盛り上がった正方形の壇がある。戒壇と推定されているが確定してはいない。壁面には、岩をくりぬいた坐禅室が並んでいるので、坐禅窟とも呼ばれる。天井・壁画は白地基調に青・緑・茶を用いていて、極めて印象的だ。宝珠と蓮の花を持ち上げる 2 人の力士を中心に、雷太鼓を持つ雷神・稲妻剣を持つイナズマ神・鹿のような風神・9 つの人面を持つ龍・翼を持つ天馬などなど古代神話や伝説のイメージが書き込まれている。裸身の飛天も 2 体描かれていて珍しい。森で坐禅を組む修行者が籠もる祠とそのまわりに出没する動物たちを描いた部分もある。図柄の面白さと色彩では、見学した窟のなかでは最高だ。

最後に第 322 窟を見る。初唐のもので、螺髻の仏を中心に 2 弟子・2 菩薩・2 天を左右に配した塑像。邪鬼を踏まえた天の表情が憤怒ではなく、至極ノンビリしているのが面白い。壁画の菩薩は変色が激しいが残る筆線を辿るとなかなかの美人のように思える。圧巻は天井のデザインで超モダンな感じだ。

特別窟を昨日 5 窟、今日 6 窟、劉さんのレベルの高い解説を聞きながら、2 人だけでゆっくり回ることが出来たのは幸いだった。SARS のお陰様々だ。特に今朝は、上の方の窟から下がってくるルートを選んでくれたので、扉を開けると朝の陽光が射しこむ。涅槃仏や唐美人の菩薩像などは、じつに柔らかな自然光で拝顔できるから最高だった。恵子や劉さんが動くと反射光が変化して、像の表情が微妙に変わる。

現在公開されている石窟すべてを最高の条件で拝観できたから満足至極。

昼食は敦煌食堂で。回鍋肉、ポテト唐揚げ、炒醬面、竹詰め八宝飯で 81 元。午後は劉さんのお嬢ちゃんとお友達も一緒に向かいの博物館、敦煌石窟文物保護研究陳列中心を見る。代表窟を同寸で再現した展示は見事だが、ここでも撮影禁止なのは残念。劉さんは、子ども達に壁画を解説していた。教育効果は抜群に違いない。

時間があるので、博物館裏の小砂丘に登る。莫高窟の全景を見ようと思ったが、少し低すぎた。9 層の大仏殿を撮す。僧侶の宿泊した窟を遠望する写真は撮れた。砂丘には色と形の面白い小石が沢山ある。拾ってはポケットに入れながら歩いたので、上着がかなり重くなった。小石まじりの砂の上に動く影を見たので近寄ると小さなトカゲ。砂色の地と薄黒い縞模様の保護色で分かりにくい。

澄みきった青空と白楊・ポプラの白い木肌と葉の緑のコントラストが美しい、研究院の門扉に繁るツタが紅葉し始めている。数葉の写真撮る。

劉さん親子も一緒に車で帰る途中、絨毯工場へ寄った。絹絨毯の製作作業を見本的にやっている。縦糸を裏表 2 組に分けて、表裏 2 本の糸に、絹糸を 8 の字に絡ませてから包丁で規定の長さに切る。一色の糸を型紙の指定する位置に絡み付けてから、次の糸を絡む作業に移り、一段終わったところで鉄の櫛で全体を打ち締める。女工さんは、慣れていて型紙は見ないで作業を続けていく。社長の話では、方々にある工場で 1500 人くらいが働いているとのこと。月給は 400 元から 600 元。眼が良くないと仕事にならないので、40 歳未満の女性が働く。

展示場には、大小さまざまな絹絨毯。同じ大きさなら、1 フィートに縦糸が何本あるかによって価格が決まる。300 本から 600 本まであって、300 段とか 600 段とか呼ばれている。いろいろ勧められたが、ホテルの売店にも良いのがあったので、ここでもペンディングにする。

部屋でビールを開けようとしたが栓抜きがないので氷挟みで代用した。休憩してから街に出る。雑貨屋で栓抜き（まけさせて 2 元）を買ってから、一昨日の露店でシシカバブー（7 本@1 元）とビール（5 元）、甘栗を買って（10 元）、麵広場で刀削面を待つあいだに囓る。

こねた塊から刀状の道具で薄い麺を直接に鍋に削り込んでいく。茹で揚がった麺を野菜を入れて炒めて出来上がり。一昨日の搓魚子とほぼ同様の味付けだが、この店の方が美味しい(@4元)。帰り道で絵はがきと石窟CDを買ったところ、上質な菩薩の模写画があるので交渉して購入。なにやら模写画が沢山になった。

10/3(金)

朝食をとってから日程変更を夏さんに電話しようとしたら、ロビーにガイドを連れて来ていた。それではということで、今日は陽関などを回り、明日は玉門関に行くことにした。凧を持って出発。ガイドは周さん、運転手は張さん、車はサンタナ。途中で給油したら、ここは1リッター2.84元だった。訊ねると、これは90のガソリンで、別に93と97のもあるとのこと。昨日、柴さんは93のハイオクを入れたのだ。

まず、市内の白馬塔。鳩摩羅什が経典を積んだ白馬と敦煌まで来たら、白馬じつはそこまでの守護神が、ここから長安までは安全な道だから自分の役目は終わったと夢で告げて昇天した。敦煌の人が白馬を慰霊して建てたのが白馬塔。4世紀末の塔を清代に修復したもの。入場料は@15元。近くに、敦煌城壁の遺跡があって、崩れた日干しレンガの上を羊がのんびりと歩いている。綿花を積んだオート三輪がノロノロ走っている。今年は、SARSのお陰でマスク始め綿製品需要が伸びたので、綿花価格が去年の2倍に跳ね上がり、農家はホクホク顔だとは周さんの話。

鳴沙山の山並みを左に見ながら砂漠の一本道を走る。影視城に寄る(@20元)。映画「敦煌」の撮影のために作られたセットで、その後、いろいろな映画のロケに使われ、10世紀の敦煌と洛陽が同居した奇妙な市街になっている。正面の城門には登れるが、裏の城門は「敦煌」最後のシーンで炎上させてしまったので、その後、張り子の城門になっている。中に葫芦細工の売店がある。ヒョウタンに書画を彫ったり書いたものだった。作者は書画家、阮文輝の娘で、婿が売店を開いている。奥に書も展示してある。「學無涯」の書に惹かれて350円で購入。

南西に走ると遠くに雪の連山が見えてきた。祁連山脈だ。ここからの雪解け水がオアシス都市敦煌を潤している。4000m級の山なみで、かなりのところまで冠雪している。雪解け水の流れのひとつ党河に水庫つまりダムが造られている。その手前、党河のつくった河岸壁に西千仏洞がある。莫高窟の西にあるので西千仏洞。19の石窟があり、今日は3、4、5、6、7、9の6窟が公開されていた。

第3・4窟は盛唐期のもので、中央に仏壇があり、壁面に説法図が描かれている。仏塑像は、みな清代のもので駄作。壁画には後代の書き込みが多く、ひどいものは素人が顔の輪郭線を描いたようなものもある。

第5窟は北魏のもので、本尊塑像は破損が激しいかたちで残っている。木・藁の芯に粘土を被せて彩色する方法がよく見える。壁画は、飛天が比較的保存がいい。光背やスカートの薄緑色が地の赤色とマッチしている。千仏にはそれぞれの名前札が付けられているが字は見えない。その上は天宮伎楽図で、いろいろの天の舞踊の姿がダイナミックに描かれている。

第6窟は北周のもの。中央には仏壇がなく、壁にある。白地に茶・薄茶で描かれた飛天が良い。

第7窟は、西魏のもので、薄緑の地に赤・白・茶色で描かれた3体仏と飛天が良い

第9窟は北周のもので、中央の柱の後ろの壁に、涅槃仏が描かれている。足をさする貴顕の姿が面白い。入って左上には、飛天の下書きが残っている。赤の線書きで、なかなか上手い筆遣いだ。これから彩色しようというところで、何かの理由で製作が中止になったのだろう。

莫高窟と同時期の石窟で類似点が多いが、保存の程度はかなり劣る。道教の道士たちの手で長く守られてきて、現在も道士が管理役を果たしているようだ。参観料は@40元。案内パンフレットは50元。

砂漠の道を進み、玉門関への道を右に見、チベットへの道を左に見ながら陽関へ向かう。

やがて緑の木々が見えて、オアシスに入る。左右がブドウ畑になったところで農家飯の店に入って昼食。ブドウの樹の下のテーブルで張さんが勝手に採ってきたブドウを食べながら待つ。緑色の細長いブドウで美味しい。片側方向にだけツルを伸ばしてJを逆にした形にブドウを育てている。種なし種で、果物として出荷するほか、干しぶどうやブドウ酒にも加工する。新疆のほうが甘味が強いらしいが、ここのも人気とのこと。

待つあいだにブドウ畑をくぐりながら歩くと、子供2人が水路の分水板を調整していた。綺麗な水で、手を洗うと気持ちがいい。濡れた手はすぐに乾いてしまった。さすがに湿度がすごく低いようだ。オアシスの泉からの灌漑でブドウは育っているわけだ。

泉にいる大きなニジマスのスープ、地鶏と野菜の煮物(大盤鶏)、ほうれん草炒め、青菜炒めに麺。ニジマスは他の川魚に比べると臭みが少ないが恵子は敬遠。地鶏は堅いが味は良い。野菜の炒めは赤唐辛子がたくさん入っていて辛い。口に残る辛さを、ブドウの甘さで消しながら食べる。麺は歯ごたえのある手延べ麺で、ジャガイモ・ニンジン・ピーマン・豆腐・肉などを細かいさいの目に切った具の入った汁麺。名称は、月偏に「操」の旁をいれた字と子麺。美味しい麺だ。合計 172 元。

給仕してくれたのが素晴らしい美人。漢族ではなく、西域の血が入った感じのエキゾチックな婦人だが、声は中音で太く、話す言葉に中国語の美しさは無い。周さんに聞くと、敦煌語で、四川・福建系統の方言とのこと。周さんも張さんも敦煌育ち。2人とも1児の親。周さんは敦煌の高校卒業後、蘭州の専門学校で2年間、日本語を学んだ。かなり正確な日本語を話す。張さんは19歳で自動車免許を取って、運転歴12年のベテラン。

食後、ブドウをもらって陽関に行く。自動車路を外れて砂漠の中の上り坂を少し行ったところに、敦煌陽関文物旅游景区がある。@40元を払って入場。西域を探検・征服した張蹇の乗馬像がある両翼にシルクロード展示館と陽関文物陳列館が並ぶ。最近出来たらしく、分かりやすい展示だが、AV説明装置ではなく、古典的な陳列法だ。中央奥には都尉府を再現した建物があり、右手には木製の砦。門を出ると、のろし台までの自動車・ロバ車・馬が待っている。往復@20元の馬車を選ぶ。自動車なら10元。

来る途中にも漢代ののろし台の廃墟を眼にしたが、陽関は、西域路最後のオアシスで、重要拠点だったから、100里毎に設けられる大型のろし台があった。上部は破損して下部しか残っていないが、砂丘の小高いところにあって、見晴らしは良さそうだ。廃墟の美を感じさせる。古代の陽関の街は、のろし台を中に、旅游景区とは反対側の低地にあった。陽とは南を意味していて、陰つまり北にある玉門関に対して、南の関というネーミング。

すこし風があるので凧を組み立てて初揚げを試みたが、風が弱いうえに風向きが変化するので3回とも失敗してしまった。周さんが持ってくれたがダメで、おまけに糸巻きへの巻き付けが緩すぎたので、糸がはみ出してきてもつれてしまった。明日を期して退却。

莫高窟付近とは違う感じの小石を収集して、馬車で戻る。出口に敦煌陶芸の展示があり、オカリナの祖形のような3穴の土笛があったので購入(30元)、ラクダの模様がついている。6時半ホテルに帰着、帰路ははやく感じられた。

恵子が、からだ凧系の修復をしてくれるが、全部巻替える必要があるから、夕食に外出しているヒマはないことが判明した。周さんに勧められたラクダの蹄と瘤を食べる予定を変更して、ひとりで買い出しに出かける。麺広場で、肉挾餅2個(@2.5元)と揚げ餅(0.4元)を買って帰る。昨日の小包子、甘栗、ブドウとビールの夕食。このところ、夕食は極めて安上がりに済ませている。

食後、ようやく凧系全部を堅めに巻替えて入浴就寝。

10/4(土)

朝8:00出発。ガイドは周さん、運転手は劉さん、車はサンタナ。昨日と同じ道を走って玉門関道へ右折。ゲートで玉門関入場料(@30元)を払って、砂漠の一本道を走る。アスファルト舗装された道が60km続く。この道は、1990年代に敦煌太陽能旅行会社が60万円を投資して舗装したもので、入場料の一部は通行料になっている。一種の有料道路なので、道の東側、つまり市街地側には、ブルドーザーが2m巾の穴と小山を作って砂漠から道路に

は入れないようになっている。西側は 50cm くらいの段差があるし、砂が細かくて 4 駆でも走りにくいとのこと。

限りなく砂の平原が続く場所、泥岩の残骸が小山となって点々と残りそこに草が生えている場所、小砂丘が茶・黒・緑の 3 色に重なっている場所などいろいろな砂漠の表情を見ながら、130km 位のスピードで北西に走る。

玉門関を右に見て道を左、つまり西に走り続ける。北側にはオアシスが東西に細長く伸びているが、湖泉には水はほとんど無く、白く塩が析出している。岩塩層を通った地下水が湧き出ずらしく、オアシスは植相豊かではないようだ。

目的地は雅丹（ウイグル語でヤルダン、中国語ではヤダン）で、この道も太陽能旅行社が 1998 年に完成させた。85km あるから建設費は 85 万元か？昔の河床を走る道で、今でも夏には浅い河が蛇行するから、所々には、河の流れを横切る凹んだ箇所が設けられていて、そこだけコンクリート舗装になっている。時速 100km くらいで凹みを通過するとミニ・ジェットコースターの気分。

まわりは、河が浸食した段丘を、砂嵐がさらに浸食した地形で、浸食が進んでほとんどならかな小丘になった場所や、まだ泥岩がさまざまな形で点在している場所がある。植物の生えているところはほとんど無い。

赤煉瓦の細長い建物と色旗が見えてきて、敦煌雅丹国家地質公園に到着、入場料@40 元を払ってなかに入る。泥岩を削り貫いたデザインの建物に展示室、会議室、レストランがある。展示は、240 万年前の疏勒河の流が作った段丘を、流れが絶えた後に砂嵐が刻んで 70 ~ 30 万年前にほぼ現在の地形ができたと言っている。売店でパンフレットと説明シートを買う。なぜか、シートの右上では広末涼子が笑っている。

公園内には一般車両は乗り入れ禁止で、専用の 4 駆か小型バスに乗って見学する。4 駆を選んで@40 元。国産の 4 駆で出発。しばらく砂漠の道無き道を走る。4 駆の本領を發揮した走り、細かい砂地では雪道のような横滑りをハンドルで抑えながらの走行。小砂丘の上り下りでは、コースとスピードの選定の適否で運転手の腕が試される。

「金獅迎賓」で停止。泥岩の浸食が横向きのライオンのイメージを創りだしている。建設途中のアスファルト舗装路に出て走るが、未完成の箇所では砂漠に迂回する。獅身人面像、つまりスフィンクスで停車。たしかにスフィンクスそっくりの岩がピラミッド状の岩の隣にある。近くまで歩くと、小石まじりの砂漠で、面白い石を拾う。泥岩は、薄い片に剥離して、岩の形状はどんどん変わるようだ。下部が浸食された岩は、塊になって崩落している。泥岩の小片にも面白いものがある。

車に戻ってしばらく行くと両側に門のような岩があり、左側にピサの斜塔がある。10 数メートルの低いものだが、たしかに斜塔の形だ。ここの砂嵐は北から吹くので、おおむね岩は南北に長い形をしているが、低いところの方が砂の吹きつけが激しいために、下部の浸食が強くなる。塔状の岩は、結果として傾いた形になる可能性があるということだろう。

また走ってクジャク岩。高さ 5m くらいの小さな岩が、クジャクの形に削られている。まさに自然の妙だ。ご丁寧に、後ろには卵形の、クジャクの卵岩。鳳凰とも見ているようだ。まだまだ先には、日本婦人とかゴリラとかいろいろな岩が続いているが、ここで帰路に就く。舗装路から砂漠へと、パリ・ダカ・ラリーもかくやとの 4 駆の疾走を経験。先を行った 4 駆が、坂でストップするのを横目に追い越しての快走。20 分ほどで出発点に戻る。砂漠走行の得難い経験だ。運転手は、ここに昔、ロブノールがあったと言っていたが本当だろうか？

レストランで昼食。白菜と豚肉、春雨の炒め、キクラゲと豚肉の炒め、羊肉とタマネギの炒め、瓜と野菜の炒め、炒醬麵。麵は手打ちきしめんのように美味しい。4 人分で 245 元。材料は敦煌市内から、水は玉門関近くのオアシスから運ぶのだから高めなのは当然だ。現在、ホテルを建築中で、ここの朝日や夕陽を奇岩越しに楽しむのが 1、2 年後の流行になるかもしれない。

食後、再度の風揚げ。微風だが 100m くらいは糸が出せた。劉さんも手伝っての初成功。

しかし、砂漠の風はここでも気まぐれで、風向きも風速もコロコロ変わるから、天空高くとまでは行かなかった。まあ満足。急いで作った甲斐があった。昨夜の恵子の努力もまあ報われたか。

玉門関方向へ走る。途中で漢長城がある。長城もここから少し西で終わる。玉門関オアシスに茂る葦の類と粘土をサンドイッチ状に重ねて城壁を造る。のろし台と長城の断片が残っている。小石を拾うが、雅丹地のものとは少し種類が違うようだ。

玉門関は粘土を突き固めた四角い建造物で、北と西に門がある。本来は別の名前だったが、北から送られてくる玉石をここで受け渡したのでこの名前で呼ばれるようになった。北側は枯れた泉で、短い葦やアツケシ草に似た赤い墨水草（インク草）が生えていて、塩が析出して円盤状に固まっている。

ここからさらに北東に走ると河倉城がある。漢代に流れていた河の岸に建てられた大きな倉庫が河倉城。いまは、泥岩の城壁が、廃墟の美を見せている。ここに揚げた食糧などが、玉門関の人口を養っていた。馬に乗らないかと誘う女性は、ここに夫と住んでいるという。北側の塩湖でできる天然塩を採取して観光客に売っている。食料などは息子が週に一度届けに来る。馬は、湖畔の草で生きているらしい。

同じ道を玉門関に戻る。少し離れたところに陳列館がある。古代の行政組織やのろしについての資料が展示されている。玉門関は極西の重要拠点で、都尉が置かれて、4万人が生活していた。のろしは、出現した人数ごとに、旗（昼間）を掲げたり粗朶を燃やしたりする数を定めていたようだ。のろし台は10里ごとに設けられ、100里毎に大きなのろし台を造っていた。

ここの売店にも素焼きのオカリナがあった。10穴で玉門関とラクダの絵が手書きされている。陽関のより吹きにくい、ひとつ購入（80元）。シルクロードで出土した魚型の土笛と莫高窟220窟の絵から構造を推定して玉門関の土で焼いたものと説明書に書いてある。

帰路も砂漠の一本道を130kmで飛ばす。遠くに湖のような屋気楼が出ている。祁連山脈の高峰の山頂付近は陽を受けて光っている。氷河のような硬い雪氷があるのだろう。

一休みしてから、ホテルのレストランで夕食。雪山駝掌などを注文。出てきたのは卵白のメレンゲを盛り上げて雪山に見立て、麓にラクダの蹄を薄切りにして味付けたものを配した皿。爪の部分と肉の部分とがある。小盤で188元だから、かなり高値だが、意外に美味しかった。

ホテル売店で電池を買う。前から見ていた絹絨毯（500段、壁掛け）を値引きさせて購入。6畳サイズの良いものも買ってしまふ、さらに琥珀のペンダントも。日本語の上手な連中で、ホテルへの店借り賃と労働者への給料支払いが忙しいので大幅値引きをしようとしている。織り子の賃金を聞くと月400元と年1000元ほどのボーナスだという。6畳サイズの絨毯は、2人で1年かかるというから、労賃は1万1600元という計算になる。今日の売値では労賃分に満たない。日本への輸送費・保険料・関税・配達料込みだから、出血販売だ。SARSで日本人旅行客が激減したので、資金繰りが厳しくなっているにちがいない。

10/5（日）

ゆっくり朝食をとってから、博物館へ行く。2階で敦煌の原始時代から明清期までの出土品、遺物の展示。土器に縄文模様があるのを発見。人間の考えることは同じ様なのだ。圧巻は莫高17窟から出た敦煌文書の展示。妙法蓮華（華ではない）経などの筆写經典の現物が数点ガラスケースに展示されている。几帳面な字体だがみな上手だ。「一」の字など、みな異なった書体で書くあたりは漢文書字作法だ。

日本語の説明員がいたので、1900年に発見された後、清政府は保存の措置を取らなかったのかと聞くと、当時は、敦煌まで政府の統制が効いておらず、発見文物は勝手に処分され、外国人に売却されたり略取されたり、民間人に買い取られたりして散逸したとの答え。民間から買い戻したりして集めた文書は北京の国家図書館に所蔵されているが、一部はここで展示しているという。説明文に1907年から1925年までのあいだに文書が帝国主義国に流出したとあるが、この時期限定の意味は不明。義和団事件後の連合軍駐兵が文書略奪に

関係したのかと思っていたが？

寛永通宝が4枚展示してあったので訊ねると、長城遺跡からの出土品という。江戸時代の銭輸出で中国に渡った銅銭は、銕潰されたかと思っていたが、案外、通貨としても流通したのかもしれない。

1階はミュージアム・グッズの販売コーナー。展示スペースの割には大きな売店だ。博物館も独立採算制なのか、販売には熱心で説明員が商品の説明もしてくれる。石窟壁画の模写や瓦の拓本から、玉製品、木工品まで揃っている。石彫刻の熊を見つけたので早速購入。これまでも気にして見つけてきたが、12支動物以外はラクダなどばかりで、熊は見かけなかった。猫目石に彫られているので熊としては居心地が悪いかもしれないが、光具合が微妙で綺麗だ(60元)。拓本集を1冊買った(38元)。敦煌研究院の医者で副研究員の人が、飛天や菩薩を石版画にして拓本のような感じで刷り出す技法を開発した。その作品集で、彩色複写とは違う味わいがある。

沙州市場を見学に行く。青果、精肉、生魚、乾物、金物、日用雑貨などの店が並ぶが、一番多いのは衣料品と靴。ジャガイモを2種売っている店があった。肉屋は塊を豪快に刀で打ち切っている。魚は鯉とナマズ。夜市でも鯉を開きにして焼いて売っている。夜市のある場所ではまだ焼き肉店は開いていない。酒屋で敦煌酒、つまりブドウ酒を選ぶ。例によって果汁80%、糖分50gなどの甘口ワインが多い。ドライワインを45円で買う。栓抜きがあるか訊ねるとひとつサービスしてくれた。

大通りの料理店で昼食。牛肉鍋、家常豆腐、敦煌?(酉に良)皮、敦煌拉面、白飯。敦煌?皮は、幅広の春雨をくるくる巻にして並べて味噌だれをかけたものだった。涼菜でさっぱりしている。敦煌拉面は、幅広のしこしこ麺でそれだけ。他の料理をかけて食べたり鍋物に入れる麺らしい。お茶代を入れて87元。残りを打包した。

昼寝のあと鳴沙山に出かける。タクシーで10元。入場料は@50元。大門から乗合車で10円で月牙泉まで。駱駝に乗ると20元。沢山のラクダが待っている。乗合車を選ぶ。月牙泉は、砂丘の中に湧く半月型の小さな泉だ。まわりの砂丘と青空を映して美しい。湖畔に茶館がある。

砂丘には砂滑り場が数カ所あって、木製の階段を登っていくと木製の櫓を貸してくれて滑り降りる。料金は10元。

ここからラクダで鳴沙山経由大門まで@50元。風があれば風を揚げようと持参したので、徒歩で北側の斜面を登ることにする。途中までは踏みしめることができる砂だったが、ある地点からは1歩登ると半歩滑る砂地になった。あきらめようかと思ったが、少し上に踏み跡があるのでそこまで頑張る。ようやくひとつの稜線に出た。気がつくリュックザックのふたが開いていて、糸巻きや背広が無い。下を見ると20mくらいのところに落ちている。滑る砂に気を取られて落ちたのに気づかなかった。やむなくまた砂を滑り降りて拾って稜線に戻る。かなり息切れする作業だった。

稜線を歩いて手近な最高点へ行って休憩。靴を脱ぐと大量の砂が出てきた。靴下も脱いで、裸足で砂を歩くと意外にヒンヤリした感触。熱砂かと思ったがさにあらず、気持ちがいい。風は全くないので、風揚げはできない。砂の上には、小動物の足跡がある。鳥らしいのとネズミらしいもの。こんな砂だらけのところで何をしているのだろう。

東に半月が見えて、日没も近そうなのでしばらく待つ。砂丘の陰が刻々変化して面白い。遠く飛行場も見える。莫高窟への道の手前には、のろし台跡らしいものが見える。そのあたりは、墓場のように盛り土や板碑が点在している。ここらはまだ土葬で、若者が死ぬと浅く埋めて、後から来る両親を下に埋葬すると聞いた。

落日が砂丘のあいだに輝く。恵子のシルエットを撮る。入れ替えたばかりの電池がへたってきた。アルカリ電池なのにパワー不足だ。オフにして回復を待って夕陽を撮る。稜線を下っていくと月が輝きを増してきた。月の砂漠の風情。平坦部に下りると、ラクダが列をつくって歩いてくる。月と砂漠とラクダの図柄を撮る。

ラクダの縫いぐるみや夜光杯、バティックなどの売店が並ぶ道を駐車場まで歩く。バスを

探したが乗り場が分からないので、タクシーで帰る。20 元取られた。売店の綺麗な日本語をしゃべる娘さんに朝会った時に、12 月には北京第 2 外国語大学で勉強するというので、名刺を渡す約束をした。朝 7 時から夜 11 時まで勤務しているらしい。労働基準法はないのだろうか。名刺をあげると、住所と名前を書いてくれた。李晶さん。北京で電話するように話す。敦煌でガールハントしたかたちだ。

一人で買い物に出てビール、焼き餃子、麻花を買って帰る。昼の打包とワインで夕食。敦煌ワインは、軽くてブドウの味が残るタイプで、かなりいける。灯りを消して窓外の月を眺めながらの敦煌ワインは好好。

10 時過ぎに周さんから電話で明日の予定を確認してくれた。

10 / 6 (月)

8:00、劉さんと柴さんが来てくれる。空港前の道を安西方向に走る。右に低い山並み、遠くに雪をいただく祁連山脈を見ながら、砂漠あるいは小灌木の茂るサバンナの中に行く。道沿いにのろし台の跡がある。10 里 40km ごとにある理屈だ。途中、道路脇に横転しているトラックがある。緩いカーブを切り損なったのだろう。榆林方向へ右折して山岳地帯に入る。茶色と黒色の縞模様の小丘陵地を縫うように走る。少し平地に出ると漢の城跡がある。かなり広い区画に城壁の廃墟がある。近くは水が溜まっていて棉を栽培している。

ほどなく小さな宿屋がある榆林の村に着くが、そこは通り抜けて、工事中の道路を迂回する荒れ地の泥道を走る。ちょっと迷って戻ってから迂回路を進むと向こうから来た車と出会って停車。榆林窟の所長の羅さんたちの車だった。劉さん、柴さんが降りて話をする。砂漠の迂回路を進んで道路に出たからは、しばらく直線で、やがて小丘陵地帯を走る。途中で碎石を満載したトラックとすれ違う。ほどなく、碎石の生産地があった。破砕機が動いて、トラックが石を積んでいる。なぜここなのか分からないが、碎石に適した岩山なのだろう。やがて、砂岩地帯に出る。右側を榆林河が流れ、砂岩を浸食して断崖を形成している。

駐車場があるが、通り過ぎて急な坂道を下ると鉄門が開いている。さっき出会った羅所長が連絡して開けてくれたとのこと。普通は上に駐車するようで、数人の中国人が歩いている。下の駐車場で下車。河の兩岸の断崖に窟が掘られている。下流に向かって右側に 31 窟、左側に 11 窟の合計 42 窟。日本語のできる周さんが案内してくれる。

最近整備が終わった階段を上まで登って、第 12 窟から見学。12 窟は五代期のもので、西方浄土経変の壁画。中の塑像は清代の葉王とその弟子達。

第 13 窟は、五代から宋の壁画で清代の修復された。天井は正方形で卍崩しの立体感のある模様と唐草模様が描いてある。清代の仏像があるが、なぜあんなに美的でないのか不思議だ。古拙の美からはるかに洗練された美を造りだした唐宋期に較べて、清代の塑像作家は退化したとしか言いようがない。道教の神像などを造るグロテスクな技法の影響か？この窟は、砂岩内に掘られた通路で結ばれている。扉の内側に左右に通路が通じていて、その奥に室がある。

第 15 窟は前室の壁画が中唐、内部のは宋代。中唐の壁画は豊満な肢体の飛天で、榆林窟第一のものという。塑像は清代の釈迦仏と侍仏・力士。宋代の壁画は北に毘沙門天、南に毘ルリ天。毘沙門天はトルバン風の衣装で手には貂を持っている。南天は弓矢を持ち、鬼姿のえびらを持つ従者を従えている。面白い構図だ。

第 16 窟は五代。当時の敦煌地帯の支配者、宋議金の寄進窟で、宋と夫人の立像が描かれている。夫人はウイグル王の娘で政略結婚だったらしい。夫人は桃型の髻を結び、ウイグルの衣装を着けているが、顔の化粧は当時流行の眉に梅花柄、頬に鳥模様のもの。後壁画は、菩薩とロウドウシャ（固有名詞）の神通力較べの様子。重そうな梵鐘を持ち上げたりしている。

第 17 窟は初唐のもので、中心に岩柱があり回りに三世仏の塑像。壁画は宋代。入口右に、光緒 33 年（1907 年）に英国人スタインの通訳としてここを訪れた蔣資生の彫り込み字が残されている。莫高窟を訪れて敦煌文書を略取したスタインは、同じ年にここに来て写真

を撮っていったとのこと。劉さんの説明によると、1900年に発見された敦煌文書は、清政府の管理下には置かれず、発見者が直接に管理していた。発見した道士は文書の価値が分からず、わずかの金で、希望者に売ったようだ。スタインに続いてフランス人ペリオが来て、ロウソクを灯しながら文書を点検した。彼は中国史の専門家だったので、重要文書・資料だけを選び出してフランスに持ち帰った。わずかながら代金を払ったのだが、研究院の解説では「盗まれた」と表現しているとのこと。

次の窟に入ると巨大な大仏の頭部が見える。下の第6窟の24.7mの大仏座像の上部だ。唐のものを清代に修復して金箔を張ってある。壁画には、宋議金の子孫が描かれている。

第19窟は五代のもの。ここにも宋の子孫夫妻の画。夫人は漢族で、鳳凰の帽子をかぶり、衣装も普通。壁画は薬師経変と西方浄土経変。建物の朱色が鮮やかに残っていて印象的だ。

第23窟は、唐のものの上に清代に道教の道士が新しい壁画と塑像を造った窟。道教の窟になっている。入口脇には水墨画があり、天井には八仙人、壁面には道教の信者だった明の朱将軍が、モンゴル風の元の軍隊と戦争している絵が描かれている。入って右裏壁には、同床異夢の絵。塑像は道教の高位者と従者。

第25窟は特別窟で拝観料は200元。入って右が観無量寿経変、左が弥勒変の壁画。極めて有名な中唐期の壁画。弥勒変では、弥勒の世が、8万4000歳で寂滅する元気な老人の姿、500歳で結婚する婦人の婚姻宴の図、2頭の牛が牽く犁耕と脱穀は1回の種まきで7回収穫できることを表す図、衣服が必要なら樹木から衣服が与えられる図などで表現されている。観無量寿経変は、踊る菩薩と楽隊を下部に描いて、阿弥陀仏を中央に諸仏が大きな回廊屋敷に集まる典型的な図柄。踊る菩薩の顔をはじめ、諸仏の顔立ちはふくよかで、やや眼が突きだしている。琵琶を弾くカリョウビンガや双頭のカリョウビンガもいる。蓮の蕾のなかに蓮花童子がいて開花を待っている。左隅には三蔵法師が白馬に經典を積み、孫悟空を連れて、浄土を拝礼している図が描かれている。西遊記以前の絵だ。さすがに見ごたえのある特別窟だった。

ここで昼食。窟内の研究員・従業員の食堂で、茹で拉麺にトマトや野菜のスープをかける面。ハム2種、インゲン炒め、香草炒めを入れて食べる。安西から運んできた食材の料理で美味しく頂戴する。水は祁連山脈からの雪解け水を濾したものを使っている。食堂でテレビを見ながら煙草を燻らしていた人物は孫さんで、敦煌研究院の研究員。第3窟の壁画の細密写真を撮影のために1ヶ月ほどここに滞在中。漢族の豪傑の風貌の人だ。羅所長の了解が得られたので、現在作業中の第3窟を見せてくれることになっていた。

食後、西夏期の第3窟を見学。入って右裏の壁面に普賢菩薩、左裏に文殊菩薩。白地に黒の微細な線画、緑と薄青だけの彩色だが、すばらしい迫力だ。普賢菩薩は蛾眉山、文殊は五大山が背景で、それぞれの修行地を山水画風に描いている。文殊の足許は池で、浮かぶ小舟の上では釈迦の説法が行われている。鱗を詳細に描いた鯉が2尾、泳いでいる。正面右の壁画は五十一面観音、左は十七面観音。ともに肌の変色は激しい。五十一面観音の周りには生活画が細かく描かれている。酒造り、鍛冶、農具などで当時の生産の有様を知る好素材だ。十七面観音はさまざまな宝具を持つ。天井は円い形で、大日如来を中心に曼陀羅が描かれている。

孫研究員が撮影のために持ち込んだ照明を点けてくれたので、画面全体を良く見ることができた。撮影は、この窟の実物大模型を造るため、窟内に櫓を組んで作業中だ。ビデオカメラもあって、菩薩の顔をカメラで拡大して見せてくれた。ビデオ画像は、色彩のコントラストが強くなって、緑と薄青が実に綺麗だ。

続いて隣の第2窟を見学。これも西夏のもの。入口右裏と左裏に水月観音が描かれている。岩の斜面に腰を下ろして体をひねった観音が、空にかかる半月を見上げ、足許の水の流れる音を聞いている構図。右壁の図では月が剥落している。肌は変色しているが、線描は迎えて美しい。左右の壁画は経変だが、諸仏の表情と衣装がすべて異なっている。孫さんが黄土色の袈裟を来た人物を指してこの色の成分はまだ分かっていないと教えてくれた。たしかに、これまでは見なかった色だ。正面の壁画には生活画の部分があるようだ。

第2・3窟は特別窟で拝観料は150元。一般窟の拝観料50元を含めて、今日は1人当たり550元を支払ったが、十分に価値ある金額だ。料金表には第2窟は100元と書いてあったようだが、差額は昼食代だろう。

周さんは、敦煌研究院の負担で西安外国語大学で去年7月まで2年間日本語を学んだ唯一の日本語説明員。水月観音を「みずつき」観音、九品を「きゅうひん」と発音するなどまだ未熟さはあるが、教えるとすぐ手帳に書き留める勉強熱心な娘さんで、やがて良い説明員になるだろう。劉さんもいろいろ指導していた。

見学者は我々だけで、ゆっくり回れたし、孫さんの説明まで聞けたから誠に充実した見学だった。橋をわたって対岸の窟も写真に撮れた。河は濁っていて水量は多く流は速い。この河が断崖を造り、石窟の造営を可能にしたわけだ。河があるので古くから沿岸に村が作られ、生活物資は生産されていたから、造窟もできたようだ。莫高窟も榆林窟も、寄進者の名前はある程度判明するが、仏師や絵師の名前は全く分からないとのこと。彼等がこれだけの技量をどこで修得したのかなど、これからの研究課題になっている。

2時半帰路に着く。車中は居眠り。途中で柳の一種の黄葉を写真におさめる。羊の群と牧童の馬も見える。往きに横転していたトラックはそのままで、運転手達は昼寝。直線道路で交通事故を見る。乗用車とワゴン車が正面衝突したらしく、車輪が曲がった乗用車は道路に斜めに停まり、ワゴン車は路肩に横転している。見晴らしの良い一本道でどうして事故か、不思議だ。柴さんの運転は極めて上手で慎重だから安心。棉を満載したトラクターが何台も綿花集積場に向かう。レンガ塀のなかに綿花が野積みされている。ふらふら運転のトラクターが行く。荷台には棉摘みで疲れた農婦たちが眠りこけている。運転する農夫までが斜めに傾いて居眠り運転。前に行くロバ馬車が轢かれはしないかと心配になる。棉摘みはかがみながらでかなりな重労働なのだろう。

5時過ぎにホテルに到着。劉・柴さんに感謝してお別れ。これで敦煌の旅は実質的に終了。ビールとワインで乾杯。

8時過ぎ、街へ夕食に出る。敦煌名優小吃広場で、異国風の美人のテーブルに座ってビール。勧められるままに棗を囓る。刀削面、抓魚子をたのむと前に食べた店から出前をとってくれた。隣のテーブルも色白の美人で5歳の子供もママ、ママといって一緒にいる。屋根の間からかなり大きくなった月が見える。月見をしながらのビールは美味しい。杏皮水を飲んで、50元。

市場を歩いて果物屋で桃を買う。一番小さい桃よりも二周り大きい桃を5個で計ってもらうと10元。20元出すとお釣りをくれないで、桃をもっと入れてくれる。一番小さい桃やリンゴを入れて20元になった。香りの良い桃で、味も悪くない。

角の店で絵はがきを買うが、榆林窟のは無い。開放間もないのでまだ知名度が低いのだろう。

10/7(火)

朝食後、葉書を書いたり、拾った小石を選別するなどゆっくりしてから街へ出る。近くの航空券売場で明日の飛行機のリコンファームをする。反弹琵琶飛天の脇を通過して郵便局で投函、中国銀行で現金引きだし。沙州市場の続きの市場、バザールを歩くと、青果、精肉、鮮魚、乾物、日用雑貨、靴、衣料などの店が並んでいて面白い。

精肉は豚と羊が主だが、ロバ肉も売っている。赤色の肉で蹄と皮のついた脚を1本付けている。東北ではシッポを付けて売っていたが、ここでは脚だ。鳥も、生きた鶏、烏骨鶏、アヒル、鴨、鳩が籠で買い手を待っている。鶏も何種類かいる。乾物店には、鉄の円筒があって、そこに干した赤唐辛子を入れて、先端に球が付いた鉄棒で砕いて唐辛子粉を作っている。モーターで動く薬研を備える店もある。

街角に求人広告などを貼る掲示板がある。なかに「征婚」と書いて性別、年齢、身長、居住地、職業、特徴、気質、未婚・既婚、子供などの情報を書いて、電話番号を記した紙がある。結婚相手募集の広告だ。男女、各年齢層の広告が沢山貼ってある。面白いシステムだ。求人は、月給300元から600元が相場で、芸術見習い工で最高が1000元。貸間は年

3800 元前後。売り部屋は 4 万元から 6 万元。

別の掲示板には、お墓の移動を指示する命令書が貼ってある。世界遺産の周辺を整理するために、特定地域内にある墓を、公設の墓地に移転するようにとの指令だ。移転費用は 500 元支給するが、期日までに移転しない場合には 50 元から 5000 元の罰金を課するという。莫高窟への道の両脇にある墓もきっと移転対象なのだろう。こういうことでも、法律で決めればすぐに実行できるあたりが、この国の特質だ。

昼食は街の食堂で炒醬面と加肉牛肉面。ここの炒醬面は、平皿にのせた 3mm くらいの丸い麺に挽肉ソースをかけたもので、見たところも食感もスパゲティ・ミートソースそっくりだ。牛肉面は、細いラーメンに煮込んだ牛肉の薄切りをのせたもので、チャーシュー麺の牛肉版というところ。ともに辛いけど美味しい。合わせて 9 元。

鳴沙山行きのバスを探したが分からないので引き返す。清真寺を訪問。立派なモスクで、2 つの尖塔とタマネギ型の主塔が三日月を掲げながら陽に輝いている。白い帽子のイスラム教徒も目立つ街だから礼拝時間は賑やかなのだろう。

書店で、拓本書と仏像写真集を購入。ここにも榆林窟関係の本は無かった。社会科学の書棚には法律解説、会計関係のものが多い。レーニン全集と資本論もあったが、経済書は少ない。帰宅して昼寝。

窓外のポプラの梢が揺れているので、凧を持って外出。ホテルの前を右に歩いて水のない運河を渡り、ポプラの並木に行く。案外、樹木の帯は深く、開けた土地は見あたらない。右に道をとると古い住宅が並ぶ。土塀をめぐる中に中庭があってそれを平屋の部屋が囲んでいる。門には万事大吉など祝い言葉を金文字で書いた赤い紙が貼ってある。門の外で子供が遊び、老婆が鉄の紡ぎ棒で毛糸を紡いでいる。のどかな風景だ。

空港への道を渡ると恰好な空き地がある。鳴沙山が遠望できて、棉畑が広がっている。風を待つが、柳はそよいでもポプラの梢を揺らすほどの風は吹かない。棉畑を観察する。草丈は 50~60cm で、1 本に 10 個くらいの実を付けている。ひとつの実は 4 か 5 の棉房に分かれていて、1 房には 10 個くらいの種子が分在している。かなり密植して、間隔は 10cm 程度だ。不整形の圃場が周りを土の畔に囲まれて続き、間に水路が通っている。成長期の綿はかなりの水分を必要とするはずだから、灌漑は不可欠だ。家の裏に植えて置いた棉はどうしたんだろうかなど考えながら水路沿いを歩く。収穫期で子供まで畑で棉摘みをしている。農夫らしからぬ普通の衣服で棉摘みをしている夫婦がいる。きっと兼業農家なのだろう。子供 2 人を遊ばせながらの農作業だ。水路脇で草をはむ羊と老牧夫。土塀のなかで羊飼いをしている家もある。水路の分岐を辿ったら、さっき渡った運河に出た。今は水はないが、春から夏には用水路になるのだろう。

夕食に出るがあまり繁盛した店がない。火鍋は人気だが、あまり食べたくない。結局、ホテルに戻って、兔炒め煮、豚肉と酸菜の炒め、ヒョウタン瓜の炒め、白飯、ビール 2 本、合計 86 元。ラクダの瘤を食べてみたかったがメニューになかった。

食堂に旅行社の夏社長が来て、ロビーで精算。ホテル代@530 元、チャーター車約 1100km @2.5 元、空港送迎@100 元、ガイド 3 日@200 で合計 7385 元の請求を 7300 元で。

10 / 8 (水)

恵子が荷物を作ってから朝食。少し時間があるので街に散歩に出る。石室書軒で榆林窟の画集を見つけたので購入。600 元と値が付いているが、定価は 380 元。交渉したら定価で売ってくれた。もう品切れの本かもしれないが、変な価格付けた。ホテルの売店で、観音像模写と王翰の玉門関の詩の軸を購入。

11 時に夏社長が来て空港に送ってくれる。北京発の飛行機が折り返しで北京に飛ぶ。定時を 20 分ほど遅れたが平穏な飛行で、北京着。空港バスで友誼賓館の前まで来て歩いて帰宅。なかなか興味深い敦煌への旅だった。

夕方、敦煌から帰る。空港バスの停留場が以前の双榆樹通りから移動して友誼賓館北門前になったので、歩道橋を渡って歩いて帰宅。小学校帰りの清水先生のお嬢ちゃんたちと会う。今日から学校も職場も再開されたわけだ。

ネットに繋がるとメールが溜まっていた。敦煌では北京の GRIC に掛けてもログインできなかったので、諦めていた。

ホテル内の食堂で夕食。酢豚など3品とビールで38元。この食堂は專家証を見せると半額になる。

疲れたので早寝したら、元の電話で起こされた。明日、名古屋に行くとのこと。

10/9(木)

早朝、目が覚めて、社会科学院講演レジュメを修正、張先生にメールで送る。

6時半ころから明るい。敦煌よりかなり東にあるせいだ。空は曇りで霧もたっている。北京青天からはほど遠い。

元からの電話でバスに乗り遅れ、タクシーでセンターへ。1、2年生の授業で、戦後の経済改革を話す。企業別組合の得失、中国の企業合同の前途と独占禁止政策などの質問に答える。送迎車で帰室。フロントで9月の電話代、1175元を支払う。国際電話が多かったからだ。

1:40、車でセンターへ。濱先生の総合講座『奥の細道』の新しい読み方—言葉遊びが「文学」になる瞬間—を聴く。3種類の底本に使用されている仮名の字体をデータベース化して、使用頻度を確定する作業から、芭蕉が特に力点を置いた箇所をマークアップしてテキストを解読するという方法が採られている。使用語彙の統計的解析手法の一種だが、仮名字体を対象としているところが斬新であるらしい。

出羽3山への行脚が細道紀行のハイライトとなっていて、この聖地を経ることによって芭蕉は新しい境地に達するという見方から、芭蕉は、「武士の道」「商人の道」とは異なって「個人」の自己実現を達成するために「俳諧道」を確立した人物という評価が結論とされる。後年の句は、自然のエネルギー、造物主の力が示される「形成力」を詠んでいるところに特徴があるとの解釈。なかなか興味深い講義だった。

4時から2年生の留学先を決める会議。4人の日本における指導教員の選定は、大きな問題だが、これまでにセンターに派遣された教員やその人の紹介する教員のところへ留学することでほぼ基本線は決まった。

急いで帰宅して李先生を待つ。現れたのは女性で、向○(四の下に正)という名から男性を想定していた迂闊さに気づく。国家○(手偏に当)案局政策法规研究司の副司長。全国の○案館の文書管理基準を定める仕事をしている。人民大学で易先生の学生だったとのこと。香山のそばの寺にある涅槃仏の石像をお土産にくださる。18日には、潭柘寺へのツアーに連れて行って下さることになった。

朝陽区の「大宅門」へタクシーで。北京の富豪の大きな屋敷を模した料理店で、宅門骨(豚のげんこつ骨の半分がスープのなかに入っていて、骨髓をストローですすり周りの肉やスジを食べ、スープを飲む料理)、○(草冠の下に悠の上部)麦菜のゴマだれサラダ、小黃魚の唐揚げスープかけ、炒醬面、八宝飯と酸豆乳(すっぱい豆乳)を喫する。珍しい料理だ。

小舞台では、京劇の歌、仮面変化、足技雑技などが演じられている。167元。

タクシーで帰宅。

10/10(金)

久しぶりに双榆樹早市へ散歩。敦煌の小さな桃はここでは売っていない。黄色いインゲンは無くなったようだが、まだ品揃えは豊富だ。大きなマッシュルーム5個(2元)、カリフラワー小(0.8元)、青と緑のインゲン(1元)、うどん(1元)を買う。

帰り道、天外天の角で、アウディと自転車の事故で、老人が道の真ん中で動けなくなっている。細い道から出てきたアウディが老人の自転車を引っ掛けて老人が脚を痛めたようだ。北京の事故処理を見学。まず、運転手が電話で連絡、自転車を歩道に移して鍵を掛けて老人に渡す。人だかりができて、老人の知り合いらしい婦人達が老人を囲み、おのずから防壁になる。社区の警備員らしい人物が通るが見物するだけ。15分位してから首都巡警のパトロールカーが来たが、これもちょっと降りて来て様子を見ただけで、連絡も交通整理もせず走り去ってしまう。運転手が老人を車に乗せようとするが、抱えられて立ち上が

った老人は脚を痛がって歩けず、また道に脚を投げ出して座り込む。30分位して、白バイの公安警官が1人来て、事情聴取をはじめた。小さな紙に状況を書き込んで、運転手と老人の知り合いの婦人に渡す。さらに、小さな紙に運転免許証記載事項などを書き込んで運転手に渡し、免許証は取り上げた。仮免許証を発行したらしい。無線で連絡していた警官は走り去ったのでおやおやと思っていたら、救急車を先導して戻ってきた。999と書かれた救急車には1人の女性救急士と運転手の2人が乗っている。酸素ボンベは備えているが、他にはめぼしい救急医療器機は装備されていない。ストレッチャーを降ろして老人を乗せ、周りの人が手伝って車に持ち上げる。救急士が添え木で右脚を固定して、知り合いの婦人達を同乗させて発車。自転車は、知り合いらしい男性が引いていった。

処理が終わるまでに、事故発生後1時間以上が経過している。警官の到着が30分後、救急車は1時間後だ。これでは重体事故での救命率は極めて低いに違いない。モータリゼーションの急進展に、事故処理体制がついていけない様子がよく分かった。この国では、事故に遭わないようによほど注意が必要だ。

事故見学で帰宅が大幅に遅れたので、恵子は事故にでもあったかと大心配。もうすこして畔上さんに電話するところだった。

ホテル前の成都小吃の小包子、マッシュルーム炒め、茹でたカリフラワーとインゲンの朝食。新鮮な野菜は美味しい。

社会科学院の講演資料を作成。

昼食は、野菜たっぷりの炒醬面。なかなか上手にできるようになった。

2時過ぎ、出かけたが雨が降り出した。傘をとりに帰るまでもなかりと空港バス乗り場に行く。宋先生と空港へ。検査入口で、航空券の姓名が中国読みのローマ字表記になっていた。花押サインのパスポートと照合ができず手間取り、友誼賓館の専任証で通過する。17:00の南方航空の便で瀋陽へ出発。約50分の飛行で瀋陽空港に着く。出迎えの車で国際会議場の天保賓館へ1時間ほどのドライブ。市内を左に見ながら東側の高速道路を走り、勾配のある一般道路を北に向かう。やがて、輝山風景区の入口を通過して広い公園の中を走り、ダム湖の沿岸に行く。遠くにライトアップされた噴水が見える。突然、立派なホテルに到着。

受付の女性達に歓迎されながら、別館の部屋に案内される。豪華なスイートルームで、シャワールームが別になった、ジャグジーバス付き。

8時から本館レストランで夕食。湖の小エビと蓮魚が出た。出迎えてくれた遼寧大学院生とドライバーと一緒に、東北料理の話などしながら食べる。やはり、酸菜を入れた餃子が好まれるようだ。麺もよく食べるというので、敦煌の搓魚子があるか訊ねると無いとの答え。地方による麺のバラエティがあるわけだ。

会議資料を受け取って部屋へ帰り、日程表を見てびっくり。セッションの司会はともかく、最後に日本学者代表答辞を述べることになっている。まあそのような歳かとは思ふ。代田主任教授は、ただ出席するだけでいいと言っておられたのだが。

ジャグジーをと思ったらタブの方はお湯が出ない。シャワーだけ。

10/11(土)

朝は6時前から明るい。斜面に建つ建物の基盤や樹木に絡んでいるツタが綺麗に紅葉している。司会をする守谷関西大学名誉教授と金東北财经大学教授のレジュメを読む。8時半に朝食。南開大学の国際会議でお目にかかった先生方と再会。

「中日経済発展過程中的制度変遷与制度文化」国際学術研討会の開会式は、莽日本研究所長の挨拶、遼寧大学長の挨拶、瀋陽総領事館の副領事の挨拶。

特別講演は、中国銀行の猿(けもの偏を取る)教授の人民元のレート問題。中国政府の公式発表と基本線は同じ。WTO加盟後の国際収支の動向、不良債権の処理問題、あるいは、外貨逃避を指摘されて、元切り下げ要因もあるという興味深い発表だった。中国の国際経

済に占める役割の大きさを自覚していただきたいと発言。人民元の安定は大切だが、それがどの水準に設定されるかが問題。猿先生は、徐々に変動幅を拡大するだろうと予測するが、どの水準が適正かが問題。多分、その中は、小さそうだ。

午後のセッションでは、守谷先生の発表「日本経済発展過程、制度変遷軌跡と経済改革方向」を司会。制度疲労の後には、制度改革、その後は、制度転換が必要とのお話。共感できる。通訳は南開大学でも一緒だった金仁淑遼寧師範大学の女性教授。

東北財経大の金鳳徳教授は、共同論文「日本経済制度の経済学分析」を弟子の安博士課程研究生に報告させる。堂々と報告。青木昌彦が基準になっているのは驚き。日本資本主義の革命を唱えた姫岡令人、つまり青木さんが比較制度学派の先端に位置付けられるのは、歴史の皮肉でしょうか？

休憩を挟んで、特許制度の役割を人民大学の関先生が実証的に解明。続いて、日本大学の石井先生が、「日本式経営と変革型リーダーシップ」を報告。自動車・家電の時代は、品質と価格競争力が決め手だったので管理型リーダーシップが大きな役割を果たしたが、情報化社会では革新的経営者による変革型リーダーシップが求められているとの報告。スキル修得、管理能力修得よりも、第3の能力が重要との指摘は説得力がある。エモーショナルな、資質の重要性とその教育による開発可能性を指摘しておられた。

夕食は、院生と一緒にテーブル。ひとり日本語が出来る女性が通訳してくれたが、そのうち何人かは英語でも話せることが分かった。泉ピン子に似た羅教授は福祉問題の専門家、希少価値の男の院生も社会保障や年金問題を専攻していた。この国でのホットな問題のようだ。コン・リのファンだということ、羅先生は、彼女は中国女性の悪い面を演じていて好きではないと発言。

院生達がバスで帰ったあとは、中国銀行の猿教授や莽所長、崔副所長、方教授らと飲む。桃山酒造の白酒は上等だ。方教授は通訳してくれた女性で、長期の日本留学経験はないが、歯切れのいい綺麗な日本語を話す。莽教授と同期、大平学校の4期生。40半ばの年齢だが、東北財経大学の国際商学院副院長。

シャワールームは、スチームバスであることを発見して、スイッチを入れるとしばらくして蒸気が出て室温も上がった。

10/12(日)

朝、湖畔を散歩。ところどころに立派な宿泊施設がある。岩はさまざまだが、中に細い筋目が入っている岩層が目立つ。この山を棋盤山というのはこの岩の模様によるのかもしれない。車できて釣りをしている人がいる。吸い込みを8本くらい投げている。少し登り道になって両側には松林がある。入ってみたが茸は生えていなかった。松以外は、アカシアと檜の類の落葉樹が大部分で、黄葉はしているが、紅葉するカエデの類は見あたらない。賓館のツタの紅葉だけが山の紅だ。ダムので堰堤が見えるところまで歩いて引き返す。帰りを見ると釣り人は1匹釣り上げたところだった。昨夜の料理のフナに似たあまり大きくない魚だ。

朝食に行く頃から雪が降り出した。ツタの紅葉に雪は美しい。

午前、2組に分かれての分組討論で、第2討論組に分けられていたが、宋先生のいる第1組に出席。守谷先生が昨日の補足発言。議事進行について発言して提出されているペーパーの中からセイフティネット・不良債権・日本的経営の3テーマを選んで討議することを提案。これによって先ず宋先生が日本の農業者年金について報告。ところが、次からは勝手に発言するかたちになって、社会科学院日本研究所の張季鳳先生が近日公開の国土開発論の宣伝と日本的経営の変革への疑問。日本の友人がリストラされた後自殺した経験から日本のアメリカ化に反対。

東北師範大学の宋教授は、現在の小泉改革の不徹底を指摘しながら、制度改革ではなく制度革命が必要と発言。江瑞平外交学院経済系教授は、構造的変化が進んでいることを、□株式所有関係、□政府介入力の低下、□企業グループの組み換え、□企業内の終身雇用制などの制度、□利益配分関係について、綺麗にまとめて説明。これらの変化は、やがて日本経済

をふたたび成長軌道に乗せると予測した。日本企業が高い技術を中国に持ち込んで安い労賃で生産した製品を日本で販売したときに得られる利潤の本質を問題にしたあたりはなかなか鋭い発想だ。国際価値論の問題だが、労働力も資金も自由移動はできない条件下での剰余価値形成は、どう理解すべきか考えものだ。

馬黎明天津社会科学院日本研究所所長は、地方自治制度の日中比較について発言。古沢賢治大阪市立大学経済研究所教授は、上手な中国語と日本語でIT産業を中心とした新しい日中協力の必要性を主張し、韓国からの留学生に日中韓の半導体産業の研究を発表させ、自分で通訳した。

江議長がまとめの発言。通訳もした張先生が、参加した阜新市共産党副書記の趙興武氏を紹介して、炭鉱都市が当面する問題に日本の経験を参考にしたいと考えていると説明。あいにく答えられる日本人はいそうにない。

昼食は莽所長と一緒にビールを飲むが、莽さんは食事途中で退席して忙しんでいる。午後は自由学術交流というから大会議場で自由討論をするのかと思っていたら、個別に話し合いをする時間だった。事実上は、休憩。部屋で休む。昼寝からさめると外は青空で陽が射している。芝生の雪も消えた。

4時半から閉会の宴。中国社会科学院の事務局副主任の黄曉勇さんが挨拶。日本人学者を代表して挨拶。近代の15年の不幸な日中関係が始まったここ瀋陽でのシンポジウムの意義を、グローバリズムに流されることなく東アジア独自の新しい制度を創る第一歩と評価。日本侵略へのお詫びを最初に述べた。今日の初めは雪、のち晴れの天気と同じく、雪の日々のあとの青天が今後の日中関係で長く続くことを祈念。莽所長はじめ皆さんに感謝、宋先生が通訳をしてくれた。

盛大な宴で、桃山白酒を堪能。新しい中国の研究者と知り合えた2日間だった。人民大学の関先生は一橋大の博士で、近著「近代日本のイノベーション」をくださった。日本の特許制度を高く評価する実証分析で、沢井実さん好みのテーマだ。

終宴は7時前で、寝るには早い。テレビでニュースを見る。イスラム諸国がアメリカのイラクからの早期撤退を要求したようだ。CCTV2でアイダを放映している。先月北京で公演した録画だ。大きな屋外運動場、工人体育场での公演は迫力がある。中国雑技や舞踊を取り入れた演出。第2幕の凱旋シーンでは、本物の象やラクダ、馬を登場させ、犬たちや、檻に入れた虎やライオンまで車で行進する。第3幕のアイダの望郷の Aria は良かった。最後は花火を打ち上げての幕切れ。

10 / 13 (月)

朝は青空。昨日と反対の方向に散歩。湖を取り囲む山のなかに頂上付近が紅葉の帯になっているところがある。カエデがあるのかもしれない。地図で見ると、輝山と棋盤山の2つが比較的高いようだ。夜は冷え込んだらしく、紅葉したツタに霜が降りて美しい。

朝食後、遼寧大学のマイクロバスで出発。湖畔を一周してくれた。紅葉はウルシの木らしい。遊園地や遊覧船がある。宿泊施設は、企業や企業集団のものが多く、天保賓館も中国人民保険会社の経営だ。瀋陽商業城集團の宿泊所もある。ダムの上を走る。ここは発電はしていない。湖畔をそれると農家があって農家飯の看板が多い。

高速道路で市内に入り、遼寧大学の新校地に乗り入れるが、昨日の雪で道がぬかるんで途中で引き返す。広大な敷地に沢山の建物を建築中だ。瀋陽北駅で何人かとお別れ。遼寧大学に行く。横長のキャンパスで、日本研究所のある建物と図書館を見学。ここには工学部系だけを残して、他は新キャンパスに引っ越す予定とのこと。緑の多い美しいキャンパスだ。

バスで市中心へ出て老辺餃子店で昼食。崔副所長が主催しての宴会。お料理と16種類の餃子、マオタイ酒。ウナギの入った餃子やカレー味の餃子などいろいろあって美味しい。3年前に食べた店とは違うところのようだ。あるいは改築したのか。

食後は故宮見物。3年前と同じく黄色と緑の瓦の色が美しい。瓦の小さなかけらを拾った。上薬がかかった上等な瓦だ。探しても他には落ちていないから、幸運だった。

古沢先生達とはここで分かれて、孫先生と空港へ向かう。途中の大運動場で、孫先生の小学生の坊やを拾う。運動会の練習があったとのこと。日本で2年間生活したので、綺麗な日本語を話す。

5時定刻前に飛行機は飛び立つ。渤海湾を遠望しながら、河北省あたりからは山に雪が残るのを見下ろす。1時間足らずで北京着。空港バスで友誼賓館前まで。宋先生にお礼を言って分かれる。

あり合わせの材料で作った炒飯をたべる。新聞には八達嶺長城に雪が降った写真が載っていた。

10/14(火)

朝は理工大学に散歩。壺焼き餅はまだできておらず、皮をこねるの見物。何度も折り曲げてこねながら、ときどき包丁で縦に切れ目を入れてまたこねる。粉を振りながらの作業で、皮に層ができるようだ。小さく切り分けて饅頭のようになかに挽肉餡を入れて丸めてから麺棒で平らにして壺の内側に貼り付ける。別のところに焼き餅がある。これは丸く伸ばした皮のうえに挽肉餡を広げてくるくる巻いて5×15cm くらいに伸ばして鍋で油焼きしたもの。3個3元を朝食用に購入。

9時に張先生が迎えにきてくれて日本研究所へ。北海公園の北側を走って東四十条あたりでUターンして下車。段祺瑞政権が政府を構えた場所に、中国人民大学と中国社会科学院の研究所がある。西洋風の三階建てのレンガ建築で大変趣がある。15年戦争中は日本陸軍の憲兵司令部が置かれていたとのこと。その一角が日本研究所で、ほかにロシア東欧研究所、アメリカ研究所など6つか、7つの研究所がある。

レンガ建築の2階会議室が会場で、中華日本学会・全国日本経済学会・中日経済研究中心共同主催での講演会になった。日本研究所所長の蔣立峰先生の司会で、国家計画委員会マクロ経済研究院の孔凡静教授、日本研究所前所長趙自瑞先生、天津社会科学の郭先生はじめ諸先生に大学院生を加えて30数名の皆さんに話を聞いてもらう。

「日本資本主義の特質とその変貌」というのが与えられたテーマ。戦前日本資本主義の特質が戦後改革で再編成された過程、高度成長の中での特質の形成と低成長期におけるその発現(日本的経営・日本的生産方式) 平成不況下での混迷と再編への試みをスケッチして、世界資本主義の新しい段階とそれへの日本資本主義の対応の難しさ、さらに、新しい段階が人類史の破局へ繋がる可能性を語った。質疑では、日本資本主義の民主化のその後、終身雇用制が否定された場合の社会的安定性、不良債権処理の可能性などの論点が出された。高度成長期の所得配分の平等化と平成不況期の不平等化、社会的安定性は損なわれるが新しい社会への理念提起がない現状では革命は起こり得ないこと、小泉政権のパフォーマンス依存性と実体性欠如などを回答とする。

久しぶりに資本主義批判論を聞いたという感想をのべた先生がおられた。市場経済化への勢いが強い中では、社会科学でも、経済成長に主要な関心があるのかもしれない。

お弁当の昼食後、日本研究所の書庫の有沢広巳文庫を見学。有沢先生の日本語関係の蔵書が寄贈されている。少し古い図書が多いから、工業経済研究所に寄贈された隅谷先生の蔵書と合わせると良いコレクションになりそうだ。耐火性にやや問題がある建物であることが気になった。

講演要旨をペーパーにすることを約束してお別れ。香山近くに宿を取られた郭先生とご一緒に社会科学の車で送っていただく。郭先生は、社会党左派の高沢寅夫と一高同室だったとのこと。文化大革命期には豚飼いをなさるなど、さまざまなことを経験してこられた先生だ。「権力は腐敗する」との言葉を引用しておられた。天津での再会をお約束。

夕方、恵子と双安商場に買い物にでる。青天がきれいだが、少し風が強い。夕飯の食材を買ってから、いつものデコレーションケーキ作りを窓越しに見物。この店は、じつに繊細な飾り付けをするし、動物の形作りが上手い。見ていて楽しい職人技だ。植物性油脂のクリームだから食味はダメ。

先日の生ハムは塩がきつくて大量の野菜で味を薄めることになった。ハム入り野菜のごっ

た煮、スペアリブ、香腸などで夕食。

今日の小津作品は「宗方姉妹」。田中絹代は演技派で美人でないこと、上原謙はその逆のケースで、山村聡はまあ両立という印象。1950年作品だが、時代の雰囲気はあまり感じさせない映像で、もの足りない。姉妹のコントラストは小津らしくうまく演出している。

9時過ぎ、元が来た。相談ごとがあるというので、何かと思っていたら、研究環境についてだった。多少は予測した事態だ。ベストな環境はそうあるものではない。

10 / 15 (水)

朝は理工大学に散歩。壺焼き餅はまだできておらず、皮をこねるの見物。何度も折り曲げてこねながら、ときどき包丁で縦に切れ目を入れてまたこねる。粉を振りながらの作業で、皮に層ができるようだ。小さく切り分けて饅頭のようになかに挽肉餡を入れて丸めてから麺棒で平らにして壺の内側に貼り付ける。別のところに焼き餅がある。これは丸く伸ばした皮のうえに挽肉餡を広げてくるくる巻いて5×15cmくらいに伸ばして鍋で油焼きしたもの。3個3元を朝食用に購入。

9時に張先生が迎えにきてくれて日本研究所へ。北海公園の北側を走って東四十条あたりでUターンして下車。段祺瑞政権が政府を構えた場所に、中国人民大学と中国社会科学院の研究所がある。西洋風の三階建てのレンガ建築で大変趣がある。15年戦争中は日本陸軍の憲兵司令部が置かれていたとのこと。その一角が日本研究所で、ほかにロシア東欧研究所、アメリカ研究所など6つか、7つの研究所がある。

レンガ建築の2階会議室が会場で、中華日本学会・全国日本経済学会・中日経済研究中心共同主催での講演会になった。日本研究所所長の蔣立峰先生の司会で、国家計画委員会マクロ経済研究院の孔凡静教授、日本研究所前所長趙自瑞先生、天津社会科学の郭先生はじめ諸先生に大学院生を加えて30数名の皆さんに話を聞いてもらう。

「日本資本主義の特質とその変貌」というのが与えられたテーマ。戦前日本資本主義の特質が戦後改革で再編成された過程、高度成長の中での特質の形成と低成長期におけるその発現(日本的経営・日本的生産方式) 平成不況下での混迷と再編への試みをスケッチして、世界資本主義の新しい段階とそれへの日本資本主義の対応の難しさ、さらに、新しい段階が人類史の破局へ繋がる可能性を語った。質疑では、日本資本主義の民主化のその後、終身雇用制が否定された場合の社会的安定性、不良債権処理の可能性などの論点が出された。高度成長期の所得配分の平等化と平成不況期の不平等化、社会的安定性は損なわれるが新しい社会への理念提起がない現状では革命は起こり得ないこと、小泉政権のパフォーマンス依存性と実体性欠如などを回答とする。

久しぶりに資本主義批判論を聞いたという感想をのべた先生がおられた。市場経済化への勢いが強い中では、社会科学でも、経済成長に主要な関心があるのかもしれない。

お弁当の昼食後、日本研究所の書庫の有沢広巳文庫を見学。有沢先生の日本語関係の蔵書が寄贈されている。少し古い図書が多いから、工業経済研究所に寄贈された隅谷先生の蔵書と合わせると良いコレクションになりそうだ。耐火性にやや問題がある建物であることが気になった。

講演要旨をペーパーにすることを約束してお別れ。香山近くに宿を取られた郭先生とご一緒に社会科学の車で送っていただく。郭先生は、社会党左派の高沢寅夫と一高同室だったとのこと。文化大革命期には豚飼いをなさるなど、さまざまなことを経験してこられた先生だ。「権力は腐敗する」との言葉を引用しておられた。天津での再会をお約束。

夕方、恵子と双安商場に買い物にでる。青天がきれいだが、少し風が強い。夕飯の食材を買ってから、いつものデコレーションケーキ作りを窓越しに見物。この店は、じつに繊細な飾り付けをするし、動物の形作りが上手い。見ていて楽しい職人技だ。植物性油脂のクリームだから食味はダメ。

先日の生ハムは塩がきつくて大量の野菜で味を薄めることになった。ハム入り野菜のごった煮、スペアリブ、香腸などで夕食。

今日の小津作品は「宗方姉妹」。田中絹代は演技派で美人でないこと、上原謙はその逆のケ

ースで、山村聡はまあ両立という印象。1950年作品だが、時代の雰囲気はあまり感じさせない映像で、もの足りない。姉妹のコントラストは小津らしくうまく演出している。9時過ぎ、元が来た。相談ごとがあるというので、何かと思っていたら、研究環境についてだった。多少は予測した事態だ。ベストな環境はそうあるものではない。

10/16(木)

朝刊一面は、中国初の有人宇宙飛行の記事で埋まっている。朝のテレビは、内モンゴルに無事帰還したことを報じた。長征ロケットの性能はすでに証明されていたが、有人飛行をソ連技術を下敷きに独自で実現したことは、やはり高く評価できる。もちろん、単なる地球周回が、現時点の宇宙開発でどれほどの意味があるかは問題だが、内外の政治状況に与えるインパクトは大きい。中国の存在感が高まり、経済成長を続ける中国人の自信が深まることは確かだ。テレビのインタビューで、これは中国の軍事力強化に大きく寄与するだろうと発言した若者がいた。米ソとの軍事力格差を意識しての発言だろう。中国のアメリカ脅威論は、かなり根深いようだ。

午前中の授業は、日本の高度経済成長テーマに、資本主義の成長体質、戦前日本の成長要因、戦後の高度成長の内外要因と得失を話した。軽武装国家であることが資金・資源の民生部門への投入拡大を可能にしたことを説明しながら、中国の宇宙開発への投資や軍事費に触れて、そのプラスとマイナスを指摘した。公害問題についての質問には、マイナスの生産物をも対象とする新しい経済学が必要なこと、個々の発生源が確定できる公害への対応は可能だが、二酸化炭素のような広汎な環境破壊物質の発生を抑制することは京都議定書発効がのびのびになっていることが示すように難しいこと、日本の企業が環境問題バランスシートを公表し始めたことなどを話す。

午後は、新聞を読んでから、読みかけの陳舜臣『北京の旅』を枕に昼寝。新聞に、北京の新しい飼犬規則による登録1号犬の写真がでている。初年度1000元(旧制度では5000元)次年度以降500元(旧2000元)と登録料が安くなったが、まだ高いからペットは贅沢品だ。カラー写真で、飼い主がポメラニアンらしい愛犬と、登録カードを持って写っている。登録カードは愛犬の写真入りの立派なプラスチック製のもの。

『北京の旅』は大変面白い。歴史物の作家だけに、故事来歴を生き生きと描写しながらの名所説明はとても良い。明最後の皇帝が、景山で縊死したくだりまで読んだが、明を滅ぼしたのが清ではなく、運輸人夫あがりの李自成が率いる反乱軍であることは迂闊にも知らなかった。その李軍を壊滅させたのが、ヌルハチが建国した満州軍と手を結んだ明の將軍呉三桂で、呉は北京に残した愛人、蘇州美人の陳円円を李軍に奪われたので発憤したという。美女円円なかりせば、清建国はどうなったのか。

夕方、利客隆に天ぷら材料を買いだし。えび、甲イカ、マナガツオ、ニンジン、春菊などを仕入れる。夕暮れが早くなって、6時には薄暮と夕焼け。マナガツオまでは箸が回らず、唐揚げで保存。ここの魚料理の揚げ物は、軽い揚げ方なので小骨までは食べられない。日本の中華料理でおなじみの鯉の唐揚げにはお目にかかれぬ。客に生きた魚を見せてから調理する機会が多いから、時間を掛けて唐揚げにすることはできないのだろう。

10/17(金)

朝、理工大の市場へ。壺焼き餅、揚げ餅、小包子、カリフラワー、インゲンを購入。ゆっくり朝食。朝刊1面は、宇宙飛行士帰還の記事。小学3年の息子の写真も載っている。易先生から電話。11月は、10日(月)に日本の社会問題について人民大で話すことを約束。午前中、ホテル内の理髪店で散髪。道具を持ってくるのを忘れたので、恵子にやってもらえないから、何十年ぶりの床屋。鋏でカットしてから、電気バリカンを微妙に使って仕上げる。ひげ剃りは遠慮して10元。専門家料金で半額だから正規には20元だ。街では5元くらいだからホテルは高い。昼は、恵子の炒醬面。乾麺を使ったのでツルツルしすぎて少し不具合。

1:40の車でセンターへ。1・2年生に技術革新を話す。農業革命・産業革命・情報革命を

概観して、戦前日本の技術革新、戦後の技術革新を説明。日本が外資の直接投資を排除する方針を取ったことについての質問があるのは、現代中国の開放路線との関係で当然だ。明治政府の外資排除、戦後の外資規制と現代中国の資本規制の対比を説明した。改革を進める上で開放路線は適格的だが、外資の進出にはマイナスの側面が伴うことも指摘。考えてみると、これはなかなか難しい問題だ。21世紀、グローバリズム時代の外資の功罪については、理論的にも未解明なところが多い。短期資金の国際移動が、一国の経済混乱を引き起こし周辺地域へ悪影響を及ぼすことはアジア通貨危機で実証済みだが、長期の資本投入、直接事業投資については、発展途上国の成長促進要因としてプラスの評価が一般的だ。かつては、自国資本による工業化保護が政策目標となって外資進出抑制が図られたわけだが、現代では、自国資本へのこだわりが薄くなったようだ。開発独裁体制の場合、合併期間満了後の自国資本化が可能だから、当面は外資規制はしないという姿勢なのかもしれない。

教員室で、元がホームページ更新、加藤・田野論文のプリントアウト。

外国語大学の正門で恵子と待ち合わせて、みんなで新徽系家常菜へ。帰国して修士論文の提出が終わった3年生4人を交えての夕食会。育児ネットワークの論文を書いたZWさんは2歳半の坊やを連れてきた。安徽料理の店だが、安徽省出身の1年生のZYさんも、安徽料理というジャンルがあることを自覚していない。なにが特徴的なのか分からないままに、みなが食べたいものを注文して15人+坊やの饗宴。

提出修士論文の話題からこれから書く論文テーマ、中国史の挿話などで賑やかな会食。さすがに陳円円の話はみな知っていた。料理はあまり辛くなくて美味しかった。ビールも入れて680元は安い。

10/18(土)

8時に李先生が迎えにきてくれたが、恵子は咳が止まらないのでパス。タクシーで清華大学西門前の出発地点へ。在留日学人活動站処公室、つまり日本への留学経験者の組織が、秋の活動として、潭柘寺訪問を企画したのに参加。受付で参加費20元を払って、水と案内地図をもらってバスに乗る。大型バス4台、100名を越える団体が出発。

四環路から航天橋で阜石路に入る。郊外アパート団地が拡がり、アメリカ風のショッピング・センターもある。まだ早い時間だが、自家用車が並んでいる。道路の並木は、槐(えんじゅ)と白楊。りんご、ももなどの果樹園も見える。婚礼の自動車の列が幾組も走っている。先頭車にはボンネットやルーフに薔薇の花を飾り付け、後続車は窓から風船を出している。今日は18日で、8の数字は縁起が良いことになっているようだ。

製鉄所と発電所のある町を抜けると山地に入る。のろのろの重量トラックを追い越しながら、曲がりくねった山路を走る。ハゼウルシの紅葉が点在して、アカシア・クヌギ類の黄葉とともに山を秋色に彩っている。紅葉は少ないが、信州の山路をドライブしているようだ。

戒台寺を過ぎてさらに奥に潭柘寺があった。駐車場から岩舗装の小道を登る。道端ではクルミ・干し棗・クコの実、桃の数珠などを売る露店がならび、物乞いも混じる。山門をくぐって入山。参殿の脇で、世話役の李贄東農大教授の司会で小集会。日本人参加者の紹介があって、斎藤法雄大使館領事部長が挨拶。案内人から、潭柘寺の来歴・見どころの説明があり、要点は李先生が話してくれた。お弁当をもらって、境内のベンチで昼食。

左右に1対ずつのサラ樹と銀杏がある。晋代の建立以来の樹齢1000年を越える古樹で、サラ双樹は、中国北部で最大のもの、銀杏は、乾隆帝が「帝王樹」と名付けた巨木。青天に豊かな枝葉を広げるすばらしい貫禄だ。サラ樹は、日本で言われるナツツバキとは違う木だ。

山腹の傾斜地に並ぶ伽藍を巡る。清代の改修だから、仏像は金ぴかで面白味はない。建物や古風な舍利塔は趣がある。石の魚鐸がある。黒い石で、案内人は隕石と説明したが、巾が1m近くある扁平の魚だからちょっと疑問。病癒しの効果があるというので、賽銭を入れて石魚をなげる人が多い。

境内の竹林には、緑と黄のコントラストが鮮やかな幹を持つ2種の竹が植えられている。色具合が逆の2種で、「金 【金偏に嬢の旁】玉竹 Green Tinged Golden Bamboo」「玉金竹 Golden Tinged Green Bamboo」と名付けられている。ボタンやシャクヤク、楊貴妃好みのカイドウの古木も多い。

四阿屋のなかに石を彫り込んで迷路風の水路を作って水を流している。南から見ると龍、北から見ると虎の模様になっていて、水に小銭を浮かべるとゆっくり流れる。李先生が試みたが失敗。寺の名前の由来になっている龍潭への小道を登るが、かなり遠いらしいので、途中で諦める。山道でも露店が出ていて、小鳥を籠に入れて売っている。放鳥による功德のためではなく飼鳥のようだ。雲雀に似た小鳥やカラの仲間、野鳥だ。広葉樹の林でカエデもあるが、数は少ない。紅葉は、丸い葉の小灌木。

門前には、寺名のもうひとつの由来の柘の木がある。北京ウオーカーではヤマグワと紹介されていたが、日本のヤマグワとは異なる。蚕も食べるようだが、皮に薬効があって不妊症に効いたり、染料としては皇帝の衣を染める黄色に使われると説明が書いてある。かつては周囲に沢山生えていたのが、この用途のためか無くなって、今では四本ほどしかない。駐車場から見上げると、前の山に樹木を切り払った帯状の縦スジが入っている。延焼防止の防火帯らしい。乾燥の厳しいところで文化財を保護する措置だ。文化財といっても、この寺は僧侶のいる宗教施設で博物館ではない。

3時に帰途につく。山中の野柿は葉を落として赤い実だけを残している。日本の田舎の秋そっくりの風情だ。車中で中国の公文書整理の現状について李先生から話を聞く。中央、省市、県のレベルに 【手偏に当】案館があって、規則に従って文書保管が行われている。日本では情報公開法制定後、残しておく公開しなければならないので、省庁文書の廃棄が加速されて現代史資料の保存状況が悪化したと話すと、中国では、文書破棄には罰則が設けられているとのこと。

出発点から友誼賓館までタクシーを拾い、門前に駐輪していた自転車（中国では自転車）に乗って帰宅される李先生とお別れ。ご自宅までは40分ほどの道のりとのこと。今日のご案内に深謝。

マナガツオの唐揚げ、焼き若鶏などで夕食。

10/19(日)

野菜がないので双楡樹早市に買だし散歩。ジャガイモ、ニンジン、タマネギ、長ネギ、カリフラワー、インゲン、枝豆、梨、分からない野菜、手打ちウドンで15元、帰りに成都小吃で小包子2籠6元。

散歩途中で、銀行から現金を運び出す作業を見かける。現金輸送車を、3人の武装ガードマンが囲んでいる。大口徑の銃、たぶん催涙弾発射銃、を構えてのものものしい警備。これなら強盗はできそうにない。

ホテルの中では、ギンナン落としを大がかりにやっている。植え込みのうえに布を広げて、棒で落としたり、木登りをして揺すったりする。市場ではギンナンは見かけないが、そのうち出回るのかもしれない。

日曜日で新聞はこないなので、昨日のを読む。一面トップは宇宙飛行士だが、全面ではない。中国の経済成長の記事では、今年第3四半期までの8.5%成長は安定していて、年率7%程度の成長は2020年までは続けられるとの国家統計部副部長の発言を紹介。根拠は明示されていなかった。SARSの一面記事は、数例の発症はあっても流行することはないとの専門家の見解を紹介。

他面は、北京の交通渋滞問題。パークアンドライドの提案もあるが、やはり駐車場が大問題。露天の駐車場で月150元、地下で350元でも、余裕はなくなってきている。公共輸送機関の充実が最大課題という。中国銀行の猿【獸偏とる】さんも、ジェットを持っているが、最近では、地下鉄を利用すると言っていた。早めに通勤して、朝食を銀行で採るのが効率的とか。銀行食堂は朝昼晩3食のサービスをしているようだ。写真入り記事のひとつは、ブッシュ訪日に際しての新日本婦人の会などのイラク戦争反対デモ。

出版会の本のことで加藤氏に相談のメール。昼食は、ザル・ウドン。
午後、元とバスで中関村路に。北京のシリコンバレーといわれる通りだが、ここはさほど賑やかではない。白石路沿いの電腦スーパーなどは超満員で、ちょっと入ったがすぐに退散。ぶらぶら歩いて海淀区バス停あたりでソフト店に入る。指輪物語のDVDなどを買う。
@15元の8掛け。

利客隆まで歩いて、中国シャンペン、ワイン、ビールを2階で買ってから、1階で、焼き鳩、焼きスペアリブ、湯葉の煮物、薄切り牛肉、卵、牛乳などを購入、153元。かなりの重量で、急いで帰る。

南開大学の講義レジュメを作成。3回講義として、「資本主義はなぜ速く成長するか」を第1回にする。あとは、「資本主義の新段階」、「日本資本主義はどこへ行く」と続ける予定。夕食の牛肉炒めはやはり堅い。肥育牛なのだろうが、問題がある。鳩は少し焼きすぎ。

10/20(月)

昨夜の雨もあがって晴天。双榆樹早市に散歩。キャベツ、トマト、マッシュルーム、包子を買う(合計10元)。国慶節向けに飾られていた鉢植えは、まだ元気な鉢を残して片付けられている。水をやればもっと保ったと思われるが、花壇の灌水のような手間は掛けられないから、枯れてしまう。花壇の水は再生水で飲用不可と書いてある。今年は雨が多かったから良いが、北京も水不足都市だ。

朝刊トップは胡主席とブッシュ大統領の会談の記事。見出しは「アメリカはひとつの中国を支持し続ける」で、日本の報道が北朝鮮問題と人民元切り上げに力点を置いているのとは異なった仕方の取り上げ方だ。もちろん人民元の安定性を強調する胡主席の発言も報道しているが、第1の関心はやはり台湾問題なのだ。一面下には日本政府が毒ガス被害に3億円を支払うとの記事。かならずしも好意的な扱いではなく、残留ガス弾の早期処理を強く求める論調だ。

出版会へのメールを書いて、まず加藤氏に送って読んでもらう。

ルフトハンザのデパート、燕莎友誼商城へ出かける。前にあった両面刺繍のパンダが売場ごと無くなっているので目論見は外れた。ボヘミア・グラスのセットが買ったときより値下げされているのでショック。チーズを買って、イケアに向かう。アメリカ店と同様の売場配置だが、品数は少ない感じだ。センスの良い商品が並んでいる。ここの目当てはスモークサーモン。外人専門家招待会するとき、バスの中であそこにはスエーデン料理があると聞いたので、食べられるものと期待したわけ。ところが、これも当てはずれで、スエーデン料理は肉団子程度。コルクの鍋敷きを買って引き揚げる。

鼓楼へ行って、前にある馬凱餐厅で昼食。「北京日本人会だより」にB級グルメの店として紹介されていたところ。看板料理の東安鶏、狗肉料理、金瓜百合、ビーフンとビール。東安鶏は、鶏肉の切り身を糸切りの野菜と炒めて酢味をつけたもので、すこし辛いがさっぱりしていて美味しい。狗肉は、これまで亡き愛犬たちに遠慮して口にできなかったが、元が食べようと言うので注文した。かなり臭みとクセのある味で、箸は進まない。やはり、犬は可愛がるもので食べるものではない。支払いは84元。

胡同を歩いて前海のほとりを周り景山裏まで歩くが、公園の入口は遠そうなのでタクシーで帰還。

加藤氏の同意が得られたので出版会にメールを送る。明日の列車の切符を買ってきて、南開大学に、到着予定と講義レジュメを送る。

夕食の買い物は、人民大学西門前の城郷超市に行く。おいしい湯葉の煮物、エビ、そら豆、煮大豆。日本人はエビが好きだといわれるが、中国人もかなりのエビ好きだ。中くらいのエビ20数匹で15元だからこの価格水準から見ても安い。双榆樹早市でも、生きてはね回るエビを路上で売っている。エビとそら豆の炒めは美味しかった。

10/21(火)

ホットケーキの朝食。やはり、小麦粉の具合が違って、日本のような出来にはならない。7:40のバスでセンターへ。ZRさんに、元が経営関係図書の解説をする約束をしたので早

出。図書館で図書を一緒に見るが、経営史・経済史関係図書の集まり方に較べると、経営学・経済学の本は揃っていない。経済用語を「現代用語の基礎知識」で見ようとしても、最新版は入っていない。これから、経済・経営関連の修士論文を書く希望者がいるから、この不備は早く補う必要がある。

2年生の授業は「鎖国から開港へ」。鎖国の意味、閉鎖経済下での経済的变化、開国・開港の影響を話す。中国との比較についての質問には、国内の商品経済・社会的分業の発展度合いの差が、両国の近代化の差異をもたらしたと説明。打撃を受けた在来綿業が輸入綿糸への原料切替で再編され、近代紡績業の市場基盤となったこと、これに対して、土布生産が打撃を受けずに持続したことがかえって中国の綿業近代化を遅らせたことを話した。日本の場合も、輸入広幅織物の小幅織物に与えた打撃は小さかったという見解があることまでは触れなかった。別の質問は、日本の領主は土地所有者かというもので、領主的土地所有と農民的土地所有の二重性、農民的土地所有の実体性に対する領主的土地所有の観念性を説明するが、ここらは、中国史と大きく異なるので、理解するのが難しいようだ。領主を行政官僚と見ると分かりやすいと話したが、こんどは、日本の地主の性格が分らなくなる。中国地主制との違いも、中国史を学んだだけでは分かりにくいことは確かだ。

家に戻って、昼食後、元を機場バスで送り出す。2時近くタクシーで西直門地鐵駅へ出て、地下鉄で北京駅に行く。風が強く、白楊の葉などが路上に舞う。秋が深まっていく様子だ。北京駅は跨線橋の工事中で、沢山の工人が働いている。シャベルで少しずつ土石を掘るが、人海作戦だから工事のスピードはかなりのものらしい。

3:10の列車で天津に。広々とした農地が続くが、雨が多かったせいか、クリークの水は深いようだ。天津北駅に停車。まわりでは古い家並みを壊しての再開発が進んでいる。天津駅で、帰りの切符を買ってからタクシーに乗る。案外、渋滞は少なく、いつもとは違う道を通って南開大学へ。正門で止められて、中には入れない。許可を持つタクシーしか入校できない。正門から歩いて日本研究院へ。3階から宋先生が声を掛けてくれる。時間を見計らって待っていてくれたようだ。

院生の周さんの案内で愛大会館に投宿。6時過ぎに宋先生が来て、専家楼食堂へ。米先生が院生とお食事中のところに参加して、夕食。インゲンと卵の黄身の炒めは、ウニが入っているかと思った。卵を細かい粒に炒める技術は面白い。揚げ出し豆腐をホタテや茸と炒め煮する料理もなかなか良い。白飯が美味しかった。風が強く、空は晴れて星がよく見える。

帰室して恵子に電話。

10/22(水)

朝、正門から出て南門へ散歩。昨夜の強風で吹き落とされた木の葉は、もう掃除されている。正門そばの新築現場では、かなり工事が進んでいる。木立はやや黄色い秋の色に変わってきた。朝日が正門の南開大学という金文字を輝かせている。周りを流れる河では、釣り糸をたれる人、河畔の緑地では体操・ジョギング・ウォーキング。河には遊覧小舟がもやっている。運河周遊ができるように、新築の平橋を太鼓橋に掛け替えたくらいだから、この船遊び事業には力が入れているのだろう。

南門前の泰達ビルは朝日に輝いて壮大到そびえる。南門は閉まっているので、人のまねをして橋脇の柵を越えてなかに入る。周総理の立像が泰達ビルに対峙する写真を撮る。昨日は、周総理が泰達を監視している構図だとの話だった。睨み倒そうという構図か、監視の構図か、いずれにしても、市場経済化には驚いているに違いない。

9時から講義。「資本主義はなぜ速く成長するのか」を2001年の『日本研究論集』の寄稿論文を参考資料として配って話す。資本主義の限界と社会主義の再評価については、特に質問は出なかった。社会主義市場経済の評価にかかわる微妙な論点だからあらたまったの発言はしにくいかもしれない。資本主義の現在の変化、戦後日本資本主義の現代資本主義的政策などについての質問には、次回以降の講義で詳しく話すことにして簡単に答える。終わってから皆さんを食事に招待。愛大会館の食堂で18名の会食。修士1年生が中心で、

男性も半数くらい。なかなかよく飲み、よく話す元気のいい諸君だ。2時から授業があるので残念ながら終宴。525元。

日本研究院の貴賓室で郭先生と会う。「概説日本経済史」と論文コピーをさしあげて、いろいろお話を伺う。毛沢東の功罪を検討して居られるとのことで、上層部にも天安門に掲げている毛沢東の肖像を降ろすべしとの考えがあるという。始皇帝の400人坑儒をはるかに上まわる知識人迫害の責任は、やはり大きいという見方。米中関係では、中国は、臥薪嘗胆、あるいは、韜光養晦の時期という発言が上層部から訪中した不破書記長に洩らされたことがあるという。有人宇宙船の打ち上げは、キャッチアップの一例だろう。

喬さんに送られてタクシーで駅へ。途中渋滞でギリギリに間にあう。車内販売で、天津名物麻花を一箱買う(15元)。北京駅について囲いの隙間から覗くと、南側を深く掘り下げたの大工事中だった。地下鉄で西直門へ出てタクシーで帰宅。

炒飯の夕食後、空港に小松さんを迎えに行く。入国審査が手間取ったようだが無事到着、空港バスで友誼賓館下車、トランクは重かったがタクシーの距離ではないので徒歩で帰宅。日本酒やお米のお土産には恐縮。

10/23(木)

寝坊してギリギリにバスに乗ってセンターへ。大衆消費社会をテーマの授業。消費の歴史を概説して、戦前戦後の日本消費社会の特徴を話す。商品の物神化、社会の解体を問題にすると、対策についての質問が出された。竜安寺蹲いの吾知唯足、石家大院の知足知不足齋を紹介して、消費者の理性的な選択の必要性を強調。

昼食は半畝園で炒醬面、餅4種、砂鍋豆腐。面には涼と熱があったので涼を注文、前回より多い感じで、あまりの葱油餅は打包。小松さんと恵子は北京探検に出かける。利客隆で中国シャンペンとビールを買って帰宅。シャワーを浴びてから新聞を読みながら昼寝。

「独占の解体」記事は、中国の所得格差を拡大させるひとつの原因である独占の解体を主張している。世界銀行の統計では中国のジニ係数は1992年の0.376から1998年に0.403、2001年に0.458になった。異系列だが、日本のジニ係数は、1980年0.349、1999年0.472だから、中国の所得格差の拡大は日本並だ。原因のひとつに、一部の人が法や制度の穴を利用して国有資産を私物化していることが挙げられている。不正な賄賂を得るようだ。これと並んで我慢できない原因として独占企業関係者の高い給与を挙げて、独占の抑制措置を先進国の経験から学んで法制化することが提案されている。1990年の全産業平均年収は2140元、最高は鉱業の2718元、最低は農業の1541元で格差1.8倍、2002年の最高は金融保険の19135元、最低の農業は6398元で格差は3倍に開いている。

「声なき民への声」は、貧困地域の少女の日記の話。スメドレーの「中国の赤い星」で紹介されたことのある寧夏回族自治区の寒村を訪問したフランスのジャーナリストに託された14歳の少女Ma Yanの日記がフランスでベストセラーになり、日本語等にも翻訳されて少女はシンデレラガールになったという。この地方では、男尊女卑の風習から義務教育を全うさせずに14歳くらいまでに女性は小学校を退学して労働に従事し16歳くらいで婚資と引き換えに結婚させられる。これに反発して勉強を続けたいと訴える日記をMaは書きつづったようだ。16歳になったMaは、月500元の印税収入で大学進学も可能になったという。中国成人の識字率は、10年前の77.8%から今日では91.3%にまで高まったが、まだ100人に7人は文字が読めず、8500万人が少ししか読み書きができない状態。2005年までに15~24歳の若者の識字率を100%にすることが教育部の目標。Maの母親も読み書きの勉強をはじめ、「可愛的我兒、二ハオマ」と書けるようになったとのこと。

昨日の新聞は、中国共産党中央委員会が市場システムの改革計画を発表したことを報じている。公有制を基軸にしながら各種の所有形態を発展させること、都市と農村の格差の是正、統一的な開かれた近代的市場システムの樹立、雇用・所得配分・社会保障の改良、国有企業経営の改善などが列挙されている。問題点は挙げられているが、その解決策はどうなっているのか不明。今日の新聞ではこの計画を市場の信頼を新たにすると評価している。私的所有の対象の拡大を保証することは、中国の市場経済化に対する内外の

投資家の信頼感を高めるといふわけだ。走り出したらもう止まらない勢いの市場経済化か。7時過ぎ、探検隊帰還。古玩城ではひやかしかけ、紅橋市場でいろいろ買い物したらしい。九頭鷹で夕食。写真入りのメニューから、魚の味噌カツ、豚フライの甘酢絡め、牛肉スープなどを注文。ビールを頼んだら変な飲み物が来たので「ピジョー」というのだが通じない。「シジョー」に近い発音をすると分かるらしい。87元は安い。双安商場のスーパーでザボンなどを買って帰る。

10/24(金)

朝、双榆樹早市に散歩。かなり寒くなってきた。栗、カリフラワー、インゲン、豆乳を購入(9.2元)。サヤエンドウを大型化したような新しい豆も登場した。成都小吃で包子と餃子(6元)も。

午前は来週のレジュメ作り。昼食後、円明園に出かける。世界最大の庭園で、19世紀の遺跡公園。明・清代に造られた庭園を、第2次阿片戦争のときに、英仏軍が破壊した。1860年10月18日の焼き払いで、建造物は全滅し、青銅の一二支像などは散逸した。園内の展示場では、10月18日から青銅像などを特別展示。大きな横断幕には、国辱の10・18を忘れるなど書かれて、大勢の訪問者がサインをしている。復元計画はあるようだが、歴大な年月と予算がかかるだろう。

池のほとりを歩いていくと、渡船場があり、10円で遺跡までのせてくれる。1人の船頭が2本櫂を漕いで、西洋建築の遺跡が残るところまで池を渡る。平底舟で、安定は良くない。乗り込むときはかなり揺れる。小舟に7人も乗せるので喫水も下がって、小松さんと恵子は怖がっている。救命胴衣などないのだから転覆したらおしまいだ。池の上は風が涼しい。池から水路、また池と漕いで、20分ほどで終点。西洋遺跡入園は15元の追加料金だが、時間もないので外から見るだけにする。大きな石の建材が転がっている遺跡。どうやって破壊したのだろう。

東門へ歩くと、大きな涸れ池がある。1人が凧を揚げようとしていたので、当方も持参の凧を組み立てる。風が弱いので少し手こずったが、ほどなく成功。数百米は揚がって、龍の字が読めなくなった。北京で初めての凧揚げは爽快だ。降ろすときリールに巻き取るのは案外大変で、小松さんの手袋を借りて引っ張り降ろした。

園内には楓の木もあるが、まだ紅葉していない。葉裏が白い楓は珍しい。ススキの穂も風になびいて、スズメの宿になっている。東門近くにも石の門の破壊された残骸が無造作に転がっている。積まれた石柱の隙間から落日が輝く図柄をカメラに収める。廃墟の美というところだが、列強の中国侵略の産物だから、鑑賞するにはあまりに生々しすぎる。

東門からバスで西直門、地下鉄で東四十条へ。保利プラザから北に100mほどの天地劇場に向かう。7:15の開演には少し早かったが入場。新風雑技舞台劇、如夢 Reverie を観る。幼い少女が雑技を見て憧れ、やがて、自分も演者になるという筋。各種の雑技の技が展開される。輪乗り、傘回し、アクロバット、鏡で裏も見せる1人アクロバット、自転車乗り、皿回し、輪くぐり、独楽使い、柱登り、合間のピエロと観客のアドリブなど。音楽と光、煙やシャボン玉の使い方が効果的で、普通の雑技とは違った魅力的な舞台になっている。観客は団体客が多く、入りは60%くらい。日本人は少ない。9時前に終演。

タクシーで王府井に出て、美食夜市を見物して粥店で夕食。三絲蛋卷(豚肉・野菜を糸切りにして薄焼き卵で巻いて揚げたもの)、粥三種、ビールで54元。もう一皿注文したのだが忘れたようで、満腹にはならなかったが、タクシーで帰宅。

10/25(土)

朝は理工大学へ散歩して、焼き餅・揚げ餅を購入。香山公園に行くことにしてバスで頤和園まで乗り、香山行きに乗り換えようとしたが、来るバスすべて超満員。タクシーも行きたがらない。やはり週末は人出が多すぎるようだ。予定を市内見物に変えて、バスで前門へ行く。道路混雑で1時間20分くらいかかったが、初めての街路も走ったので面白かった。地下鉄13号線をくぐったあたりではショッピングセンター建設の大工事が進んでいる。北京師範大学は大きなキャンパスだ。西単は人出がすごい。

前門を歩いて全聚徳天安門店で昼食。北京ダック1匹、水かきの辛し酢味噌、レバーの炒めを賞味。さすがに、皮のパリパリ感は上等だ。スープは少し薄目の感じで、感心しない。区画整理でなくなってしまった北京大学前店の方が上手だった。

タクシーで北海公園に行く。入園していくつか階段を登って白塔の上まで行く。故宮や中海などのながめが素晴らしい。ラマ教の寺院だから、仏像は少し変わっている。インドの影響を受けたりして、歓喜天も置かれている。文革期に破壊されなかったのはちょっと不思議だ。清朝は、モンゴル族にラマ教を奨励した。遊牧の民の攻撃的性格を和らげるためと人口抑制の意図といわれる。ラマ教では長男以外の男児を出家させて一生独身を通させる慣習があるから、モンゴル族が増えるのを抑えるのにラマ教が用いられたとか。

白塔の北には洞窟があって仏像などを飾っている。ここ瓊華島は、金代に石を積み重ねて造られた人工島だから、この洞窟も人工。出たところには乙姫や布袋さまの作り物があって一緒に写真を撮ると1元を箱に入れる仕組み。

島の北側に出て、大型渡船で対岸、北海の北岸に渡る。北門に行く途中に九龍壁がある。故宮にもあるが、ここのは両面に合計18匹の龍がタイルでレリーフされた見事なもの。寺の中にあつた照壁だが、寺の建築は壊れて、壁だけが残っている。

北門を出てタクシーで鼓楼へ。もう入門時間は過ぎていたので外側からの見物。前海の方へ胡同の路地を歩く。古道具店で、小松さんが乾隆代制と銘のある銅製の茶器セットを購入。本物なら超安値。前海から胡同小路を抜ける。鳩の夕方の運動時間で、笛の音をひびかせながら群が胡同の上を飛ぶ。鼓楼大街駅から地下鉄で西直門へ乗って、タクシーで帰宅。

炒飯などで夕食。小松さんはマッサージへ。あまり上手ではなかった由。

10/26(日)

朝、写真をハードディスクに移しているときに操作ミスで行方不明にしまった。元に電話するが留守。そのままにして3人で双榆樹早市に買いだしに行く。8時30分を過ぎていたがまだ店は開いていた。キャベツ、大型サヤエンドウ、ピーナッツ、手打ちウドンなどを買っているうちに、ハンドマイクで「そろそろ(こう聞こえた)」といって回る人がくる。一斉に商品を袋や箱にしまい始めて、じつに手際よく店じまい。9時前にはもう掃除。道でロバの引く果物屋から梨を買う。

途中の野外運動用具でストレッチを試みる。いろいろな用具があつて、全身の軽い筋肉運動ができる。日本の公園では児童用の遊具が多いが、高齢化社会では、老人の保健用の運動器具を備えることもこれからは必要だ。ゲートボールばかりが運動ではあるまい。半畝園そばの甘栗屋で大粒を500g、10元。

利客隆スーパーが開いているので2人は買い物。大きな袋を持っているので店前で待つ。歩道に買い物客の自転車が並んでいる。帰るときに係員に2角払っている。係員は2人もいる。15m位の場所に4列、1列に30台くらい駐輪しているから120台くらいは並んでいる。平均30分駐輪として、13時間の営業時間中に2000~3000台は停まるだろう。1日400~600元の収入になる。これはかなりな額だ。どこの収入になるのか分からないが、係員の経費は軽く稼ぎ出せる計算だ。

もうひとつの観察はタクシー。店の前で乗り降りする客が多いので停車するタクシーのタイヤを見てみると、トレッドがすり減っているものが大多数で、なかにはほとんどトレッドが無いものまである。これでは、雨の日のブレーキは良くは利かないのではないか。雨の日には、タイヤを見てからタクシーに乗った方が無事だ。

お土産用の乾物などを仕入れて2人が出てきた。干し百合根を探していて遅くなつたらしい。どう処理してあるのかは分からないが、干し百合根は、きれいに戻せて味も良いことを先日発見した。日本では見かけないからお土産適品だ。

遅い朝食をとっていると元から電話。軽井沢に着いたそうで、相談したが、写真の発見はできなかった。敦煌旅行の後の10月の記録だから、無くなると残念だ。ハードディスクのどこかにはあるはずだから、あとで元に探してもらおう。

昼食替わりに抹茶と羊羹、甘栗。2人は景德鎮陶器店などを見に前門方面へ出かけた。昨日の新聞は、蒋介石夫人宋美齡が、106歳で死去の記事を載せ、宋家3姉妹について紹介している。かつて中国で最も影響力の強かった女性だったが、1975年の蒋介石没後は力が衰え、1991年に渡米してニューヨークに暮らし、10月24日に安眠と書いている。特別のコメントは付けていないが、歴史的役割の評価は厳しいのだろう。

先日の記事の続報もある。河北省の村で男性の葬宴中に会葬者がネコイラズ中毒になって10人が死亡したという事件は、葬られた男性の未亡人が、食事にネコイラズを混入したのが原因。なぜ毒を入れたかとの質問には、息子夫婦との関係を強くしたかったからと答えている。死者が出るとは思わずに、中毒事件になると、その補償問題について息子夫婦が母親に相談するだろうから、自分の発言権が強まると考えての犯行とのこと。中国社会における親子関係の微妙さをうかがわせる事件だ。寡婦になった後に、息子夫婦に疎遠にされることを恐れたのだろう。家族の絆が希薄化する傾向を象徴している事件にちがいない。土日曜版には1週間平均の大気汚染度グラフと解説が載っている。先週は汚染度最高値最悪が蘭州の190、太原の186で、上海は155、天津は148、北京は122と大都市は100を越えている。数字の意味は不明だが、進みつつある大気汚染への関心は強いらしい。北京では名物焼き芋が、市内営業を禁止されているとのこと。自転車の荷台の片側にドラム缶利用の釜、反対側に芋の袋をつけて焼き芋を売る光景は郊外では良く見るが、市域では見かけない。銀座に焼き芋屋がいる日本の方がこの点は寛大だ。しかし、焼き芋屋をしめ出したくらいでは空気はきれいにはならないだろう。シャーリーなどの小型タクシーもそのうちにしめ出すらしいが、中型車なら良いという問題でもなかろう。北京青天を取り戻すのは、もはや不可能ではなかろうか？

午後は陳舜臣「北京の旅」の続きを読み終わる。歴史の回顧はさすがに手慣れた文章だし、1978年初版だから現在の北京の変容以前の姿を描いているところも面白かった。円明園破壊のくだりを読むと、乾隆帝が集めた財宝文物の略奪と石造物破壊の先頭に立ったのはフランス軍で、イギリス軍は一部が参加したにとどまったが、焼き払いはイギリス全権のエルギン卿の指示らしい。大英博物館の円明園関係文物は、フランスから購入したものとイギリスは主張しているようだが、大同小異で、中国に対するヨーロッパ列強の侵略行為は、敦煌文書も含めて、おぞましいの一語に尽きる。出遅れた日本の侵略が文化財略奪の点ではさほどひどくなかったのも当然かもしれない。先進列強が盗るべきものは盗り、破壊すべきは壊したのだから。

買い物部隊の帰還を待って、夕食へ。広東料理店で、乳豚の丸焼きのパリパリ皮、海鮮煮込み、百合・銀杏・豚ミノ炒め、酢豚、炒面、ビール。176元。帰途、甘栗1.5kgを購入。小松さんのお土産。

帰室後、中国シャンペンで乾杯。

10/27(月)

朝、成都小吃で包子4籠購入。2籠は小松さんのお土産用。7:40の空港バスで小松さん出発。風が強く、白楊の葉がざわめく。葉が堅いせいか、大げさな音がする。仙波先生に社会科学院講演の報告葉書。

新聞トップは、ニュージーランド訪問中の胡主席とクラーク首相との会見の記事。中国の外交活動も活発だ。人民協商会議議長の蒋介石夫人遺族への弔意表明の記事もある。中国近代史で影響力ある女性で、抗日戦争に貢献し、民族の分裂に反対し、平和統一と中国の繁栄を願っていたと評価している。民進党など台湾の独立派への警告記事も載っているから、国民党旧リーダーを評価することには、政治的意味合いがあるのだろう。

市場経済に立ち遅れている法制度の改正促進記事では、会社法、証券法などが国有企業中心の規制的内容になっているのを改正する必要性を唱えている。経済関係では、中国の4大国有銀行の不良債権が今年前半期に貸出総額の26%から22%に減少したが、これは不動産貸付や自動車ローンが伸びた結果の数字で、健全化とはいえないとの記事とならんで、中国銀行の海外支店・事務所が560、27カ国に増え、資産の30%が海外資産となり、税引

き前利益の 83%が海外業務からのものとなったとの記事がある。中国銀行や中国建設銀行は不良債権を抱えながら積極的な海外業務拡大路線を採っているようだ。

午前中は、授業のレジュメを2つ作る。昼食にしようとしていたら、インターホーンが鳴る。出ると、小松さん。バスが遅れて、9:50の飛行機に間に合わなかったので、ペナルティを払って明日に変更してもらったとのこと。お気の毒でした。

うどんの昼食。昼寝。小松さんはプールへ。隣がスポーツクラブになっていて、料金は1回20元。テニスコートは、平日1人1時間60元だ。ゴルフ練習場はクラブ付き30球で40元、追加は30球10元。卓球は1人1時間30元、アスレティックジムは1回20元。

南開大学2回目のレジュメ草案を作る。

夕食は天外天で。太刀魚揚げ煮、ピラミッド型の豚バラ肉煮、ヘチマと赤唐辛子のフリッター、青梗菜とマッシュルーム炒め、豆花。バラ肉薄切りをどうやってピラミッド型に作れるのか、ヘチマのフリッターが何故あんなにふくらむのか、柔らかい豆花がどうして箸でつまめるのかなど、中国料理には謎が多い。ともかく美味しい。ビールともで149元。

帰途、双安商場並びの茶芸館思茗齋に入る。細割り竹にメニューを彫り込んだ巻物から龍井茶を注文。可愛い女性が小さな缶に入ったお茶を持ってきて茶芸を披露してくれる。ぐい呑風の細長い茶碗と背の低い茶碗、急須、茶注ぎをお湯で温める。お湯は茶盆の箕の子にこぼす。大型ピンセットで茶碗をつまみながらの操作。木製の細長い匙で急須に茶を入れて湯を注ぐ。1分ほど待ってから金属製の茶漉しを茶注ぎにのせて茶を移す。茶注ぎから細長い茶碗に茶を入れて、上に低い茶碗をかぶせて、手品のようにひっくり返す。上になった細長い茶碗の香りをきき、低い茶碗の茶を味わう。なかなか優雅だ。茶うけに緑豆菓子をもって、何度もお湯を注いで茶を楽しむ。残った茶は持ち帰る。茶1缶が80元、お湯代が3人分30元、茶うけが15元。小松さんの和菓子注文サンプル用に茶うけをもうひとつ打包。

韓国の権赫基氏からの英文メールで経歴が判明。韓国語訳を承諾して、東京大学出版会にもメール。

10/28(火)

7:10の空港バスで小松さん出発。30分早いから、今日は間に合うだろう。

2年生の授業は明治維新と明治の経済をになった農民・労働者・資本家・官僚について。戊辰戦争は必要な戦争だったのか、権力闘争にすぎないのではないかと質問。資本主義化のためには封建制打破が行われねばならないし、植民地化の危機を避けるためにも倒幕が必要だったと説明。維新と関連して、中国の改革開放をどう評価するかとの質問には、経済成長を目指す限りは市場経済化は有効だが、貧富格差などマイナスの影響が現れることは避けられないから、今後の政策展開が、改革開放の歴史的評価を決めると回答。さらに、毛沢東時代の評価を訊かれたので、平等な社会か成長する社会かの選択が問題で、その選択によって歴史評価は異なること、また、大躍進・文化大革命の誤りは毛沢東の失敗として認めざるを得ないと答えた。明治官僚が比較的クリーンだったと話したことに関連して、中国の裁判官・弁護士の不公平さを批判して改善の見通しを問う質問には少し驚いた。若い人たちも、法治主義が行き届いていないことを感じているようだ。経済の近代化と政治の民主化にズレが生じている現状を指摘して、民主化には時間がかかるだろうと語った。既得権益を持つ層が存在する限り、政治改革には反発する力が生じることは、西南戦争でも明らかで、内乱の危険まで冒してあえて改革を進めるのは難しそうだと話す。ただし、西欧流の民主主義を採用することにはマイナスの面もあり、共産党指導が適切に市場経済のマイナス面を排除する可能性もあることを指摘した。ここは大きな問題点だ。

バスの時間に遅れたので歩いて帰室。理工大学のなかの新築事業は基礎工事がかなり進んできたようだ。構内は、湯瓶や弁当箱をもって食堂に行く学生達であふれていた。

炒めうどんで昼食。樋口先生がくださった北京情報誌をながめる。日本人向けの雑誌が数種類あって、生活・娯楽情報が載っている。

新聞トップはバグダッドの自爆テロの写真入り記事。その下は、甘粛省の地震被害地と陝

西省渭河流域の大雨被害地への救援活動記事。陝西省では大雨で洞窟住居が崩壊して数 10 万人がホームレスになったという。Cave dwelling とはどんな住居なのか分からないが、ホビット族の家のようなものか？他にも洪水で 30 万人が避難していて、大災害になっているようだ。

別の記事では、急速な経済成長による環境悪化が警告されている。砂漠化は、1980 年代の年間 2100 平方キロから、1990 年代には 3436 平方キロに加速し、河川の水利用率は 60% から 90%にも達して危険値をはるかに超え、森林の質的悪化も進んでいる。これらが、自然災害に対する抵抗力を弱めていると指摘されている。国家発展改革委員会の高官も「持続可能な発展」を目標にすべき時期だと語っているが、これまた難しい問題だ。「社会主義的市場経済」の前半に力点を置けば、「持続可能」にすることはできそうだが、「発展」は難しくなるし、後半に力点を置けば、「発展」はしても「持続可能」にはならないだろう。昼寝と講義レジュメ手直しなどで午後をのんびり過ごす。夕食は、ジャガイモ炒め、オムレツ、ご飯とみそ汁で済ます。

10 / 29 (水)

朝、理工大に散歩。友誼賓館の北門からだと、バスの給油場にあった道沿いの建物が取り壊されている。また新しい風景になるようだ。理工大の北門から構内にはいると、「技術の改革こそ生産力」とか「3つの代表を執行して、貧を扶け、前進しよう」などのスローガンが掲げてある。生産力と書くあたりが、理工大らしい。焼き餅と豆乳を買って帰る。餅屋のおばさんは、顔を覚えてくれたらしい。

朝刊は、対米貿易黒字問題がトップ。温首相が、訪中したエバンス商務長官との会談で、漸次アメリカからの輸入を拡大させて貿易収支をバランスさせると発言した。別の記事では、最近9ヶ月で輸入が40%増加し、貿易黒字は54%減少しており、このままでは2004年には貿易収支が赤字になる可能性もあるとの報告書を紹介している。輸出企業への税金払い戻し制度を改正してリベート率を引き下げたので、輸出にブレーキがかかると指摘しての結論だ。この戻税制度の実体はよく分からないが、来年1月からリベート率が平均で3%ポイント下がるので、限界的な企業は輸出から手を引く可能性があるとのこと。財政負担の観点からのリベート引き下げだが、実質的には、輸出奨励金の切り下げだ。貿易収支動向が不透明な現状では、人民元のフロート移行は無理だろう。

1面下には、国土資源大臣の更迭が報じられている。重大な規律違反で現在査問中というが、職掌柄の汚職か？公務員の規律問題は、「権力は腐敗する」法則から見ても、大きな課題だ。

新しい道路交通安全法が来年5月から施行されるが、これは、自動車の対人事故は、過失がなくとも運転者の責任と認定するという過激な内容。昨年の交通事故は77.3万件発生し、10.9万人の死者、56.2万人の負傷者を出したという。たしかに自動車の運転は乱暴だが、歩いたり自転車に乗っている方も無茶をしているから事故は多発する。これを、自動車の側だけに責任を負わせるのは、現状から見るとすこし気の毒な感じではある。しかし、急速なモータリゼーションの弊害に立ち向かおうという意気込みはうかがえる立法だ。

雑炊の昼食。恵子は、昨日は北京に来て2回目の1円も遣わなかった日という。結果は、食事に現れる。

1時過ぎ、李向がん先生が迎えにきてくださって、元土城遺址公園に向かう。農業科学院、中央財経大学の南の学院南路を東に走って西土城路を左折、つまり北に曲がったあたりから、土の長城と堀が北に延びている。北3環状線をくぐって北土城路手前で下車。ここから土城は東に曲がって続いている。堀と土城周辺を公園に改修する作業が今年完成して、彫刻や滝・蓮池などを配した細長い緑地が新しい北京名所になった。公園を歩くと、樹木には名札がついていて、槐にも国槐、洋槐、紅花洋槐があること、松も油松、白皮松があることなど勉強になる。黄色く黄葉しているのは黄櫨、白楊は正しくは毛白楊、サルスベリは紫薇などなど。

中央部に今年できた大彫刻がある。世祖フビライを中心に諸民族やチーター・象などが巨

石彫刻を組み合わせて建ち並び、石彫りの首都大都の地図や、陶タイルの大きな風俗図がある。宴会風景は、敦煌壁画の浄土変のように踊り手と楽士を細かく描いていたり、隊商や雑技も描かれている。

土城の下部から堀に流れる下水口の遺構も保存されている。大都造りでは、当然ながら都市下水網も重要だったわけだ。馬のブロンズが並ぶあたりが公園のはずれで、その先にも土城は続くが、まだ公園にはなっていない。

車を拾って民族村方向に行く。目当ては凧揚げ場。少数民族の住居建物がならぶ民族村の東側に南北に巨大な路が走り中央が幅の広い緑地帯になっている。李先生もカナダでも揚げたという愛用の凧を組み立てて、トライ。恵子に持ってもらってかなり長く糸を伸ばして駆け出すが、数 10mほどで落下。なにしろ無風状態だから何度やっても失敗。ほかにも凧揚げをやっているが、ひとつだけが揚がっただけでみな敗退。李先生も熱心に試みるが不成功。薄暗くなったので引き上げる。

車で李先生のマンションへ行く。20~22 階建てが 10 数棟建っている新しい団地で、中央部には地下駐車場があり、その上は庭園になっている。2000 戸ほどあって駐車スペースは 700 台ほど。自動車時代に対応した団地だ。20 階のお宅にお邪魔して、ご主人にご挨拶してからなかを拝見してビックリ。木材をふんだんに使った内装で、和室まである 4 LDK。中国では、マンションは、間取りの決まった部屋を購入して、内装は自分で注文して完成させるのが普通だ。うかがうと、天井・壁・床・照明・建具などすべてを、李先生が、イメージを描いて職人につくらせたとのこと。インテリアデザイナーの才能もお持ちで、シックな仕上がりになっている。和室の床の間にはお手描きの松鶴の軸。畳もここで調達できるが、和室が作れる大工はいないので、日本の住宅雑誌などを見せながらの細工で苦労したとお話。さらに、南の小部屋には 21 弦の中国琴があって、古典曲を 2 曲弾いてくださったのが素人はなれの腕前。李先生の才人ぶりにはすっかり感心してしまった。ココという長毛のネコも飼われている。20 階だから窓から出ることはかなわず、一日中部屋住みだから、かなり退屈なことだろう。経営史研究所の末吉さんが描いた李先生像や河上さんが贈った花瓶も飾ってあった。末吉さんが油絵を描くとは初めて知った。世の中、才人は多い。

団地前の鍋料理の店、良田鶏で会食。国務院勤務のご主人が材料を選んでくださったが、なかなか的確な選定で美味しかった。鶏ガラと人参はじめいろいろな薬種を煮込んだ乳白色のスープで、放し飼いの鶏、羊肉の薄切り、イカボール、高野豆腐、茸、緑豆春雨、油松芽などを煮てゴマだれで食べる。油松の実を発芽させたものは珍しい食材だ。松ヤニ臭は全くなく、歯ごたえがあって美味しい。最後は、短冊型の面を小姐が両手で引き延ばしてくれた大きめのキシメン。ビールも入れて 127 元は超安値だ。おまけに残ったスープはコーラのポリ容器に入れて打包。

面を延ばしてくれた小姐は、甘肅省出身の中学卒の少女。エレベーターには付きっきりで運転する田舎出の少女。都市に寄り添う農村。ふたりとも可愛いく、そして、いじらしかった。

10 / 30 (木)

1・2 年生の授業は「ジャパン・アズ・ナンバーワンと言われた時代」で、日本的経営・日本的生産方式を話すためのイントロ。高度成長が終わった理由からはじめて、資本主義と企業経営・生産方式の世界史の変遷を語る。株式会社のコーポレート・ガバナンスについての質問には、変化しつつある日本の現状を説明。中国でのこの分野の研究者の第一人者として、南開大学の李維安先生を挙名した。ついでに総会屋の話までしてしまった。

帰宅して一休み。新聞では、中国憲法の改正案の記事、児童の登下校時の危険性の記事、乳業への転換で成功した農村の話などが興味深い。憲法を新しい情勢に対応して改正する提案が来年出されるが、要点は、人権関係と所有関係で、人権保証と私的所有保証を一層明確化するようだ。

朝のバスでも中国で登下校の送り迎えが盛んな話が出たが、記事では、通学児童の危険性

についての意識調査で、交通事故の危険性を児童の 57%、親の 58%が第 1 順位に挙げていて、第 2 順位は通学時に強盗に遭う危険となっている。一人っ子を守るために、登下校時の送迎が盛んなわけだ。3 輪車に児童を乗せたおじいさんや、箱形の数人乗りの送迎 3 輪車をこぐ男性、さらには自家用車で児童を送迎する親の姿をしばしば見受ける。

内モンゴル自治区で 2.67ha の痩せた土地を耕していた Chen さんは、一家 6 人を養っていけなかったが、政府の補助を受けて酪農を始め、農地を牧草地に転換して 4 頭の乳牛を飼うようになってからは年間 1 万 4400 元の収入を得られるようになった。あと 5 頭、乳牛を増やしたいと思っている Chen さんは、幸せな生活だと語っている。この地方では、清朝いらい耕地になった牧草地を、ふたたび牧草地にもどす動きが盛んで、黄砂の発生源だった裸の大地が、緑に覆われるようになったという。朝食に豆乳にかわって牛乳を飲む家庭が増えて、オーストラリアからの輸入牛乳もスーパーに並ぶ時代だから、酪農は有望な産業となったようだ。

パーク・ビーンズの昼食後、1:40 の車で恵子とセンターへ。和栗先生の日本学総合講座「日本語教育における文法教育」を聴講。外国人の日本語教育を長年続けてこられた先生の話は、大変興味深かった。ニュアンスの多い日本語を、正確に教えるのは難しく、その教育法については努力が重ねられていることがよく分かった。

質問する中国人、とくに、再教育をうけに入学した日本語教師は、さすがに上手な日本語を使う。それでも、ところどころ違和感を感じてしまう。「この本をさしあげましょう」という表現を目上に対して使用するのは不適切と説明する教科書を挙例されたので、私を使うことがあるが不適切ですかと質問。ほかの先生方の発言もあって、結論は「さしあげる」は少し恩着せがましく響くということで、発話のコンテキストによっては不適切でない場合もあるとのこと。日本語は、ほんとうに難しい。

文法的正確さよりもコミュニケーションが出来ることが大切という代田先生の発言をめぐって篠崎先生から反論がでて、代田先生が再発言。社会系教員として、言語のコミュニケーション機能とは別に、社会的支配構造の中の差異化・差別化機能にも注意すべきと発言。恵子にいわせると、一言言わないと気がすまない癖が、つい出てしまう。

バスで帰宅。今日も 1 元も遣わない日になったので、チーズとワイン、昨夜の打包スープと茹で乾麺で夕食。

10 / 31 (金)

朝、双楡樹早市に散歩して、カリフラワー、インゲン、卵、うどんを買ってから、パン屋で食パンを購入。1 斤足らずで 7.9 元は高い感じだ。コーヒー、チョコレートなど洋風の食品は高い価格設定になっている。輸入品は人民元が安いせいだが、食パンは輸入小麦でも使用しているのだろうか。

久しぶりのパン食だが、デニッシュ系の食パンでトーストには向かない。まだ、美味しいトースト・ブレッドは発見できていない。

ユーリカ大のシュワブ学部長にプレゼントを郵送。10 日ほどかかるとのこと。

バスで前門へ出る。バスの二階に座ったが、今日の北京は霧が立ちこめていて視界が悪い。天安門広場も乳色に霞んでる。無風で、名物の凧は揚がっていない。歴史博物館に入る (@ 30 元)。まず、唐代の生活展を見る。陶製の人形から、唐三彩の馬・駱駝・皿、青銅器、瓦、レンガのレリーフ、陶磁器、壁画など、かなりの逸品が展示されている。西安の永泰公主墓の高松塚に似た壁画も実物大写真で見せている。

3 階のペルーのクスコ展はちょっと眺めるだけにして、本館の展示場に行く。避暑山庄特別展示は、現在の河北省の北部の承德市に清の皇帝が造った夏の離宮のレイアウト、ジオラマ、建物、所蔵品を展示している。清王家は、ラマ教信者だったから、舍利塔や仏像が特殊で、ヒンズー教の影響も受けている。獅子頭の菩薩像や歡喜天ポーズの像もある。乾隆帝による四庫全書 7 コピーのひとつを収納した文津閣もこの避暑山庄に造られていて、その部分再現が展示されている。木製の棚に、木箱に入れた筆写本が積み重ねて収納されている。

次は、秘宝展。仰韶文化、三星堆文化から清朝までの名物が並ぶ展示は迫力満点。馬を調教する土人形は、逆らう馬と手綱を引き絞る調教師が対峙して、綱はないからパントマイムのような趣で面白い。唐三彩の大きな馬や駱駝が、5、6年前に発掘されたものというのも驚き。袖を翻しながら踊る土偶、異民族の衣装を着けた人形など、見飽きることはない。前門の店で、恵子は長コートを購入。タクシーで琉璃廠へ。小松さんにあげてしまった榮宝齋の便箋、顔真卿・王羲之の書体本などを買って、白石の絵はがきなども仕入れる。和平門の角で、馬蘭拉面の小碗、牛肉面を食べる。小碗は4元、牛肉面は12元で、ともに美味しい。

バスで帰宅。2階建てのバスは、分離帯の槐の枝葉をこすりながら走る。戻ってからしばらくして、インターホンが鳴って元と英ちゃん幸ちゃんが到着。意外に早かった。

歩いて九頭鷹へ。ここは美味しい店だ。食後、双安商場をぶらつく。部屋に戻って、中国シャンパンで乾杯のやり直し。英ちゃんたちを元が部屋まで送る。